

山中瀧 寛永十年三月二十五日聖廟御法樂

岩波をこすゑにかけて松かせもさらにおとなき山のたきつせ
なみだにぞやがてかりねの夢さむる深山夜ふかき瀧つせの聲
水上はこすゑのつゆやちりひちのつもりてたかき山の瀧津瀬
雨の後やまのみどりにあらはれて清く涼しきたきのしらいと
名所瀧

世にひびく名さへぞたかき白雲のうへよりおつる布引のたき
白玉のまなく亂れて見るも聞くもさながら雨とふるの瀧津瀬
海路

ふるさとを思ふやおなじ過ぎゆくをともに見おくる沖津舟人
故郷草 寛永十六年三月二十四日

あれまくも春におもはぬ故郷のかきねに繁きつばなすみれよ
閑居 同十四年二月晦

心わが心よりしづかならずばしづかなる隠家とてもちりの世のなか
のがれこし心にも似す夢はなどなほ思はずに世にかへるらむ
閑居待友

今更にとふべき誰れをまつの門さすがに三つの徑をのこして

草庵燈 慶安元年九月二十四日

草の戸のすき間の風に燈の消えやらぬほどと住むやたれなる
草の庵の朽ちなむのちの螢よりかすかに残る夜半のともし火

古寺松 元和六年聖廟御法樂

法のこゑにそれもや通ふ高野山あかつきふかき庭のまつかせ

古寺鐘 正保三年十月三日

小初瀬やもみぢ吹きおろす山風にこゑも色あるいりあひの鐘
鐘のこゑに今日はあすかのあすといひし我が怠もいまぞ驚く

山家 寛永十三年十月二十日百首御當座

さきだちていりし心ぞ馴れぬべき今住みそめむ山のおくにも
よしやとへ思ひしよりも山里の住みうからぬもいはまほしきに

山 家寛永十六年四月二十四日

思ひ入るころのおくの隠家にすまばや山はよしあさくとも
法に入る道とほからじおこなひも物にまぎれぬ山をもとめば

山家煙同十三年十一月十六日二百首御當座

冬ふかみさらに折り焚く柴の戸のけぶりをそへて冴ゆる山風

山家燈同三年四月二十四日

柴の戸にたれかしこきを友として文に向へる夜半のともし火

田 家同十三年十月二十日百首御當座

はかなしな假庵ならぬもかりそめにかこふ田中の賤が家居は

田 家同

もる聲も水のひびきも絶えはてて氷る冬田のいほのさびしさ

田 家同十四年七月二十四日

秋風のやどりとやなすもる人もかりて稻葉の小田のかりほは

田家鳥

おどろかすあとよりやがて歸りきて門田の鳥ぞ人にまちかき
今こそと門田の鳥の聲のうちに軒のつばめもおもひ立つらし

幽徑苔

誰がはらふ道ともなしにおのづから苔に塵なき松のしたかげ

岡 篠寛永十六年正月二十四日

かの岡にもゆる草葉のうらわかみ霜にもかれぬ小篠をや刈る

庭 竹親同二十年三月九日
竹親王御方御稽古御會後十輪院出座初度

吳竹の園生にのこせ世世の道に老いぬる松のにはのをしへを

窓 竹同十三年十一月二十日

いや高く生ひそふままに大空もおほふばかりの窓のくれたけ

今年生のかげさへしげく吳竹のはやまも窓に見えずなりゆく
竹不改色

これを世の姿ともがな吳竹はすぐなるものいろもかはらぬ
竹契遐年寛永三年九月八日二條亭行幸

もろこしの鳥も住むべくくれ竹のすぐなる世こそ限しられね
水樹佳趣多同九年正月十九日御會始

しらたまの數にもしるし池水のたきつ岩根のまつの手とせは
ふりせずよ柳のかみも若がへる池のかがみのはるのおもかけ
青柳のみどりをうつす波のあやにはえある池の鶯の毛ごろも
言の葉の種ならぬかは水とほく山つらなりてかすむこずるも

松同四年八月二十五日

紅葉こそよそにもおもへ松風のこゑには秋をわかぬものかは
百敷やまつのおもはむ言の葉の道をふるきにかでかへさむ

松同十四年十月二十四日

ももしきや植ゑしわがよも思ふには幾程ならぬ松の木だかさ

嶺 松元和元年十一月二十日

つもりしもつひに嵐の枝はれて雪にいろ添ふみねのまつばら
はらふよりつもりもやらで雪にさへつひにつれなき嶺の松風

嶺 松正保四年二月七日

かすむかと峯の檜原はくもる日もまつの嵐はひとりつれなき

浦 松元和八年七月二日

松風も秋にすすしく音かへてうらめづらしき志賀のからさき
和歌の浦やみちくる八重のしほ風に松もや浪の音を添ふらむ

庭上松寛永十七年十一月十日

家家の松のことの葉ちりうせぬ庭のをしへもいくよならまし
この宿に今日をはじめとかきつめて千代も積らむ松の言の葉

砌 松寛永二十一年正月六日

百敷のふるごとかたれ我がみても久しき世世の松ぞしるらむ
もしきの砌の松のあひおひに散りうせぬ種や世世の言の葉

松有歎聲 承應元年十月十八日

松に吹くもやはらぐ國の風なれややすく樂むこゑにかよひて
風吹けばそらに知られぬ白雪のりちにしらぶる松のこゑかな

名所松寛永十四年四月二十四日

百敷や誰れをしる人たかさごの松のふりぬるむかしがたりも
門 杉同十三年十一月二十日

あはれたれ待つこともなくさしこめて世を杉たてる門の明暮

麓 柴慶安三年五月二十四日

日をさふる山のふもとの涼しさに眞柴かたしきくらす頃かな
みどりなるふもとの野邊をわけならす檜の葉柴の露の涼しさ

鶴伴仙齡寛永七年二月七日御會始

仙人の名におふ宿ぞ千代かけてここにもちぎれ鶴の毛ごろも
萬代をみつの鳥なるあしたづのここにもかよふ道はへだてじ

名所鶴同十五年七月二十日

すむ鶴にとはばや和歌の浦波をむかしにかへす道は知るやと

關 鶏同十四年八月二十四日

名残あれや鳥が鳴く音に起きいづる關のかや屋の月を残して

白露立汀同十六年五月八日

しろたへの池のはちすのまだ咲かぬ汀の鷺はいろもまがはず

馬同十四年九月二十四日

思ふぞよ千里の馬をたづねても知るらむ人はさてもなき世を

對龜爭齡

池水をのどけき宿とよろづ代をわれにちぎりて龜やすむらむ

よろづ代をここに數へてももしきの外にもとめぬ龜の上の山

筏寛永九年十月二十五日聖廟御法樂

心あれや散りゆく水をせきとめてもみぢ葉ながらたたむ筏師

曉 鐘 元和九年四月二十四日

おどろかす曉ごとの鐘のこゑになほさめはてぬ夢をしぞ思ふ

夕 鐘 寛永十四年十月二十日

春秋のいくゆぐれを惜みきて鐘もつきぬるとしを告ぐらむ

夕 鐘 同十六年六月五日

さすが身はおどろきながらつきはてぬ願も悲しいりあひの鐘

薄暮鐘

こゑのうちに花ちる山のさびしさも見るばかりなる入相の鐘

寺近聞鐘

さめぬ^{はてぬ}べき夢路ぞとほきあけくれの寺はここなる鐘の聲にも

浦船

なにはがた浦波とほき蘆間よりおなじ一葉と見ゆるつりぶね

漁舟連浪 寛永十四年十二月四日

海士人の一葉にまがふ舟よりもかろき身をおく浪のうへかな

明けたてばおのが浦浦漕ぎ出でて世をうみわたる海士の釣舟

野寺僧歸

鐘のこゑをわが住むかたとかへるなり野寺の門を月に叩きて

旅

名残おもふ人の出舟^{舟出}にさはるかとうれしき今朝の心あひの風

旅 朝 寛永五年二月二十四日

旅ごろもあさたつ野邊のささ枕一夜のふしもたれかおもはぬ

思ひやれ故郷とほくかり寐して篠わくるあさの袖のつゆけさ

朝まだきまだき起き出でぬ何にかは心とどめむ旅のやどりは

秋 旅寛永十三年十一月十六日二百首御當座

おもひやれ床は草葉をしきわぶる旅寐のあきの露のふかさを

旅 夜

おきそふや故郷とほき露ならむ篠のまくらのひとよひとよに

旅 行寛永十三年九月十六日

みやこにと聞けば賤さへ一筆のたよりにたのむ旅のみちかな

旅宿嵐

たのめこし夢さへたえて草枕ふるさととほく吹くあらしかな

旅行友 元和六年六月二十五日聖廟御法樂

おもふより遠くきぬらし旅ごろもわくる夏野の草たかくなる

旅 宿寛永十六年九月二十四日

何かうき草のまくらぞ故郷とおもふもかりのやどならぬかは

羈中關 同年七月二十四日

都びとあかずわかるる夢路にはあやなまさしき關もかためず

旅泊雨

夜の雨をうきものとしも聞きわかすさわぎなれにし浪の枕は

旅泊夢 寛永十五年四月二十四日

船人のいつからとまり浪なれて見^{まが}らむ夜半の夢もかな^{はかなし}しき

旅泊夢 同年九月二十四日

浪さわぐうきねの枕またうきぬみやこの夢のかへるなごりに

眺望 日暮 同十六年六月五日

釣舟は見えすなるより見えそめて暮れゆく沖に近きいざり火

川眺望

いにしへのちざりにかけし帯ばかり一筋しろきをちの河^{せせ}なみ

ふかくなる青葉の山のふもと川なつしもしろきなみの色かな

こりつめるしばしがほども行きかへる世の營や宇治の川ぶね

海眺望寛永十六年十二月二十四日

おもかげを浦の煙にさきだててかすまむ春もちかのしほがま

海眺望飛鳥井前大納言依所望一首懷紙御清書

あま小舟初雪なれやわたつみの浪よりしろきおきつしまやま

湖水眺望寛永三年三月二十四日

わたつみのかざしにはあらで白妙の花のなみよる志賀の浦風

望遠帆正保三年十二月三日

知るやいかにこぎゆく船のとも鳥ほくそれだなに見えぬなみの哀を

見送るをみるやいかなる行く舟はまだ消えぬまに波ぞ隔つる

獨述懷

へだてなくいひむつぶとも世の中におなじ心の友はあらじな

述懷非一

道道のその一つだにいにしへのはしがはしにもあらぬ世にして

いかにしてこの身一つをたださまし國を治むる道はなくとも

寄鏡述懷

うつし見ぬ我れやいかなる世の中に人の鏡はいまもこそあれ

懷舊

ひらけなほ文の道よりいにしへにかへらむ跡は今ものこさめとイ

見す知らぬ昔人さへ忍ぶかなわがくらき世をおもふあまりに

寄船無常寛永十六年六月二十四日

世の中の浪のさわぎもいつまでの身の浮船よさもあらばあれ

寄橋雜

思へ人木曾のかけ橋それならで浮世をわたるみちもあやふし

浪の音に聞き傳へても思ふぞよふみ見ばいかに天のはしだて

寄衣雜

うつりかはる世の習をもをりをりにかふる衣の色や見すらむ

速寛永九年十二月二十五日聖廟御法樂

あづさ弓いるにも過ぎて年ごとにこそにさへ似ず暮るる年哉
吉野川かげもながれて行く月の雲のみをさへよどむせもなき
立ち行くもあとになるみの濱千鳥しほあひ早き浪のさわぎに

逢坂關

關の鳥はうちも寐ななむ人ごころすぐなるをりに逢坂のやま

鳥羽

淀川や波よりしらむあけぼのに鳥羽山まつのいろぞ夜ぶかき
おきまよふ霜の色のみしら鳥の鳥羽田のおもの冬ぞさびしき

鏡山

山の名のかがみをかけて夕日かげ空にかがやく雲のいろかな
こほるをや曇るといふらむ鴉の海のみづの鏡の山もうつらす

物名かにはざくら こざくら

初花まつはなもさこそほかにはさくらめどこの色のこざくらぶべしやは

神 祇

伊 勢 寛永十六年七月二十四日

うごきなき下津岩根の宮柱身を立つる世世のためしならずや
にごりなきごころの道をたてそめし五十鈴のかはの宮柱かも

社 頭 賀茂社造替有頃

うつしても見ばや宮居もあらたむる賀茂の河霧深深きためしを
見ても思へすなほなるしもかげ高き内外の神のかやが軒端を

社 頭 曉 寛永十六年六月二十四日

あかつきの霜もおくかと神がきや榊葉しろきなつの夜のつき

社 頭 松久 同十五年五月七日

住吉やいつの御幸にあひおひの松はしるらむ世をもとはばや

社 頭 祝 同二十年二月二十五日 聖廟御法樂

世世かけてたのむ北野の一夜松ひとつふたつの道のためかは
一夜松十かへりのはなも百千度なほ咲きそはむ宮居ひさしき

寄 社 祝 同九年六月二十五日 聖廟御法樂

九重のためならぬかはまもれただ天津やしろも國津やしろも
まもるより世世のただしき風もあれや北野の松の言の葉の道

寄 月 神 祇 同十六年八月十五日

月よみの神のめぐみの露しげきこよひの秋ぞひかりことなる

釋 教

釋 教

ふかくいるもあさしとを
知れ法の道山のおくなりさ(イ)麓ならずは

春釋教

霜ながら消えも残らじ春日さす野邊の若葉のつみはありとも

應無所住而生其心

ぬしや誰れとはへ(イ)ば答へよあまの子の宿宿(イ)もさだめぬ法(イ)法のうう(イ)きぶぶ(イ)ね

未顯眞實

慶安三年十一月十一日
本源自性院關白一周忌追善左府勸進

たへなれや終に四十の霜の後世にあらはるるまつのことの葉
十といひて四方の山邊の春にだに見ざりし法の花ぞひらくる

如是我聞

我が聞きし人の心をたねとして世世にやのりの花は咲くらむ

照于東方東照權現十三回忌五十首卷頭

いちじるし妙なる法にあふ坂の關のあなたをてらすひかりは
在於閑處

しづかなるみやまの松の嵐こそここにつもる塵もはらはめ
おのづから月もくむも(イ)らし静なるこの山みづのすめるは(イ)ころを

無諸衰患

あふげなほ八洲のほかも浪風のうれへなしてふ法のまことを
たのもしなあまねきつゆのめぐみには花も衰へす蝶も愁へす

啐啄同時

寛永十九年霜月二十七日
於國母御殿仙洞御物語

さやけしなかひこを出づる鳥が音の(イ)にやぶやぶ(イ)しもわかわか(イ)かずかず(イ)めぐる光は

啐啄同時用同

立居なくかひこの鳥のつばさこそ山もさはらず海もへだてね

空門極品

後水尾院御集 下卷

空しきか色なき色は誰れか見むよし見む人も見ぬ世ならずは

秋霧のたちもおよばぬ大空のくまなきつきは見るひともし

世尊拈華迦葉微笑

ゑみの眉開けし花は梅か桃か誰れ知らざらむ誰れ知らずとも

徳山入門便棒

明石がた瀬戸こす舟をうつ波にのいいはほも山ものこすものかは

僧問趙州狗子還有佛性也無州云無寛永二十年正月四日御物語

かくれ家のいづくかはあるゑのこ草それはかと問へば山梨の花

僧問趙州如何是祖師西來意州云庭前栢樹子

そめてみよしなさばうしや西より來る秋の色ははいろなき庭のこすゑを

高亭隔江見徳山便曰不審徳山舉扇招高亭忽然

大悟

風きよし山つらなりてみづとほき入江の波のしろきあふぎは

ありとある事はさながら内も外も世の常ならぬ世の常をこそ

右一首一本題癸丑同祿の時顯令和尙に 又一本詞書に寛文十三年五

月九日禁裏院中のこりなく町屋にいたるまで夥しく焼失し侍るころ

もの毎に聞きても思へ見ても知れかたき岩瀬はやすの河原を

いへばえにいはでも何か耳にきき目に見る事の外にやはある

見しや誰れ見ざらむ誰れか見ずもあらむ見もせぬ人の見ぬも見ぬかは

君見すや散る花ながらとのもりの朝ぎよめせぬ庭のひかりをいは

花鳥の色香もなにか老が世はかべにむかへるはむいほかなくことてこそ

右二首一本題御くちすさみの御製

おのづから思ふは物を思ふかは思はじこそはうきおもひなれ

右一首一本題無覺無性 又一本題寛文十三年の頃の御製

おもひやれいるがごとくも梓弓にちかきやそちかきかづく老のねざめをいを

右一首一本題延寶二年冬七十九の御口號

後水尾院御集 下卷

賀

寄道慶賀寛永十五年正月十九日御會始

思ふことのみちみちあらむ世の人のなべて樂む時のうれしさ
行く人のとほしともせず東路のみちのはてまで治まれる世は

祝

絶えせじなその神代より人の世にうけてただし敷島のみち

祝言元和九年七月十二日

いまこそと袋にはせめあづさ弓やつのはえびすもみな靡き來ぬ
まもるてふ五つの常の道の道しあれば六十あまりの國もうごかす
をさめ知る人の心よ戸ざしせぬ民よりもなほ嬉しとやおもふ

寄日祝寛永十六年六月五日

天津日を見るがごとくに惠ある世とだに知らぬ時のかしこさ

寄日祝同年九月二十四日

つきせじな天津日嗣もくもりなく出で入る影の照すかぎりは

夏祝言慶安三年四月十九日御會始

今ここに人の國さへたたきこむと君に知らする水鶏とぞ聞く
五月こば植ゑむ田づらぞ水ひろき民のところに雨をまかせて

冬祝言承應元年十月四日

鶴龜も知らじな君がよろづ代の霜のしらぎくのこる日かずは
松にすむ鶴の毛衣ふゆきてやおきまさる千代の霜を見すらむ

寄道祝寛永十七年造營之頃

九重の繩ただすなりただすなり木の道のたくみも世世のあとをのこして
行く人のみな出でぬべき道ひろくいまも治まる國のかしこさ

寄國祝同十五年二月二十二日水無瀬宮御法樂

ためしなやひとの國にもわが國の神のさづけて絶えぬ日嗣は

たがへすをはぶく春にぞあらはるる民安國のもとつこころは

寄龜祝寛永二十一年十月二十九日

九重にうつせる龜の山は^{かゞ}げに知らぬ千とせのちまでも見む
思へただ誰れもかくしてむつかしき世の外に經むかめの齡^{とし}は

爲君祈世同十九年正月十九日御會始

千代もしるし御垣の竹のふして思ひおきてかぞふる人の誠に
やすかれと萬の民をおもふまで代代の日嗣をいのるほかかは
九重の君をたださむ道ならで我が身ひとつの世をばいのらす

寄世祝同十四年十月十六日國母御方御當座

祈りおく千歳は代代につきもせじありとある人のひとつ心に
世をば今たれおろかにも祈りおかむ惠の露のかからぬもなし

雜 雜

八月中旬の頃中院大納言通村武家の勘當の事

ありて武州にある頃つかはさる

思ふより月日經にけり一日だに見ぬは多くの秋にやはあらぬ
秋風にたもとの露もふる里をしのぶもぢずり亂れてやおもふ
いかにまた秋の夕をながむらむうきは數そふたびのやどりに
見る人のこころの秋に武藏野もをばすて山のつきやすむらむ
何事もみなよくなりぬとばかりをこの秋風にはやも告げこせ

東照權現の十三回忌につかはさるる心經のつ

つみ紙に

ほととぎす鳴くは昔のとばかりや今日の御法を空にそふらし
あづさ弓やしまの浪を治めおきて今はた同じ世をまもるらし

かしはの葉のかたしたる石を將軍 家光公につ
かはさるとて寛永十六年三月

色にこそあらはれずとも玉がしはかふるにあかぬ心とは見よ

硯の命は世をもて數へ知るとかや人の世のさ

しも短きにかへまほしき事よ故院の常に御手

ふれし物をと思へば崩御の後は座右におきて

朝夕もてならしていつしか二十年餘七年にな

りぬ今はとて永源寺の住持に譲り與へて彼の

寺の具となさしむ自から經陀羅尼書寫の功を

つまばなどか結縁にならざらむやとてなむ

海はあれど君が御かげをみるめなき硯の水のあはれかなしき

我が後は硯の箱のふたよまでとりつたへてしかたみとも見よ

山陰道の傍に世捨人あり白茅を結びて住める

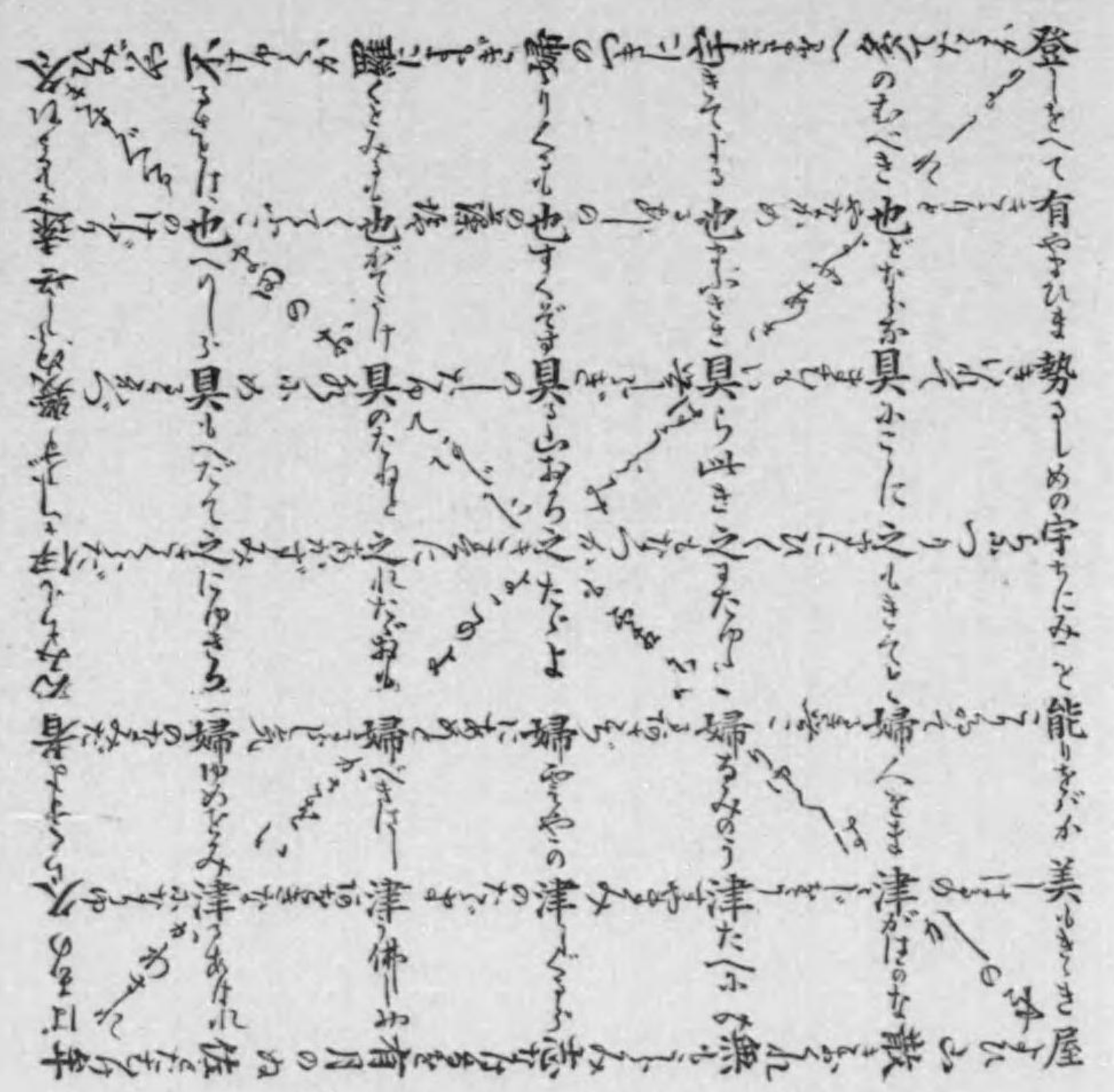
事十年許になりぬ彼の庵に銘して桐江といふ
三公にもかへざる江山を望みては詩情の助と
なし一鳥なかざる雪の朝岑寂をあまなひては
禪定を修し既に詩熟し禪熟せり爰に十篇の金
玉を聯ねて投贈せらる幽賞やます翫味あく事
なき餘に芳韻を汚し拙き言葉を綴りて之に酬
ふといふ愧赧甚しき物ならし一絲和尙へ
遺さばる

う開らやまし思ひいりけむ山よりも深きこころのおくの閑けさ
い醒かでそのすめる尾上の松風にわれもうき世のゆめを醒さむ
人人おもへこの身をうけながら法の道ふみも見ざらむ人は人かは
来来うぐひすもところ得顔に厭ふらむ心をや鳴くひと來ひと來と
門門こころして嵐も叩け閉ぢはててものにまぎれぬよもぎふの門
宵宵やまざとも春やへだてぬ雪間そふ柴のまがきの草あをくして

去年去聲よりもことしやししるまゝげき雪おもる深山の杉のしたをれの聲
 この國につたへぬこそはうらみなれ誰れあらそはむ法の衣を
 世世にふるはさても思ふに何を比かは人にもとめて身をば拳めむ
 山山ふるさとにかへればかはる色もなし花も見し花やまもみし山

永井信濃守領し來れるきたといふところの天
 神の社荒廢して年久しくなりぬるを修造のい
 となみ功終へてかの社にこめ奉りたき念願と
 て御製を申しうけし時つかはさる

家のかせ世世につたへて神垣や絶えたるをつぐ梅もにほはむ
 海邊の月に雁ある繪の讚を禪閣所望ありしに
 ことうらまにこころもとめす來る雁やおなじ所の月に鳴くらむ
 東照宮三十三回の遠忌をむかへられて彼の社
 に奉納せしめ給ふ御歌慶安元年四月十七日



後水尾院御集 下卷

右蜘蛛の御製は登有勢字能
 美屋散無志有佐幸久者伊幾
 遠冬不羅婦宇多(東照の宮三
 十三回忌を弔ふ歌)といふ二
 十四文字をめぐりにおき、中
 の五行に各也具之婦津(薬師
 佛)の五文字をこめらる。御歌
 は十六首也。

たけがりの興ある日袖にこきいるばかりも木の葉はまだ染めあへねば正保四年十月六日長谷御幸の日

霜の後又もきて見む名にしおはばさこそやしほの岡の紅葉ば

御たけがりののち將軍家へげざんに入るべく

候御製申請たきよし板倉周防守所望申上けれ

ば宸筆の御色紙をくださるとて

わけ見れば草木もさらにとやめて野山が末の道もさはらすた

御山莊に御幸ありてはたえだといふことばを

たち入れ給ひて

ゆいかではたえたへじ春のやまざとに見し面影の月はかすます

行幸の御おくり物のさうの琴のことちづつみ

にかきつけさせ給ふ慶安四年二月

記しおく世のふる事のおのづから絶えたるをつぐ跡習はなむ

將軍 家光公薨去のとき女院御方へつかはさる

あかなくにまだき卯月のはつかにも雲隠れにし影をしぞ思ふ

いとどしく世はかきくれぬ五月闇ふるや涙のあめにまさりて

ほととぎす宿に通ふもかひなくてあはれなき人の言傳もなし

たのもしなほ後の世も目の前に見ることわりを人に思へば

ただ頼めかげいや高きわか竹の世世のみどりは色もかはらじあ

聖護院宮へつかはさる

野山なつかしく徒然のあまり花壇のあたり徘徊

徊して手折しまま一枝見參に入候

このごろの菊ぞうつろひ盛なるさこそ紅葉もちぐさなるらめしほ

聖護院宮道晃より

野山やうやういろづき叡覽にそなへ度と存候

折節御花壇の一枝拜領候なかなか紅葉には目

もうつるまじくかしまりてながめ入候ばかりにて候一枝の菊にけたれて色もなし山の木の葉は千種ながらもいにし

このごろの時雨に森の紅葉もいかかと北山鹿苑寺章長老所望申つかはさる

とはばやな衣笠岡のあきの色をきて見よとこそ鹿も鳴くらめ

御影をかかしま給ひて色紙形にあそばしつけ

若イらる般舟院につかはさる

うしやこの深山がくれの朽木がきさても心のはなしにほはば

右一首一本御ぐしは妙法院法親王御ぐしより下は探幽法印圖

泉涌寺につかはされける御影に寛文十三年二月十九日

時ありて春しりそむる一花に見よひとはまえだも咲きのこるかは

身はかくてまたも來ぬ世に水莖の跡だにしばし留めかねつツイむもうき

初の御歌は一了一切了といふ意を遊ばされけるとなむ。

御著到百首 寛永十四年

春

立 春三月三日

あづさゆみやまとの國はおしなべて治まる道に春は立つやきぬらむ

朝 霞四日

世は春の民のあさげの煙よりかすみも四方のそらにみつらしむし

谷 鶯五日

鶯のこゑきくよりやのうちにや雪ふかきたたみにのこころもはるにとけゆく

残 雪六日

みねつづき都にとほきちかき山山のかぎりも見えてのこるゆきしちゆきかな

若 菜七日

ひま見ゆる澤邊の氷踏みわけてわかな摘むてふ道はまどまはす

里 梅八日

吹きまよふ空にみちてや梅が香も誰が里わかぬ月のしたかせ

簷 梅九日

たれとひてこそはとも見む淺茅生や人は軒端の梅のさかりを

春 月十日

鳴きくらす鶯の音によろこびの色をそへても出づるつきかな

春 曙十一日

見しままの心にとまる面影や誰がならはしのはるのあけぼの

歸 雁十二日

したはれて來にし心の雁ならばかへる雲路をいかで知るらむ

春 雨十三日

あづまやのまやのあまりに霞めるや降るもおとせぬ春雨の空

岸 柳十四日

後水尾院御集下卷

生ひまじる岸根のたけのふし柳おなじみどりも春やわくらむ

待 花十五日

待た^たで^だ見^みむ思ふに違ふあやにくの世のことわりに花や咲かぬと

初 花十六日

めづらしと見るを心のちしほにて咲くいろふかきはつ櫻かな

見 花十七日

いかなれや見るものからのわりなさも心の花の春に^はそひゆく

花 盛十八日

あすを待つ今日こそ花は盛なれ咲き残らねば散らすやはある

落 花十九日

よしや今日散るも色香のほかならぬ花には風を思ひかへさむ

歎 冬二十日

誰れゆる^ゑにいはぬ色しもみだるらむ忍ぶにあらぬ山吹のつゆ

池 藤二十一日

池にすむ鴛とやさこそ行く春をうらむらさきに藤も咲くらめ

暮 春二十二日

花鳥にあかぞ終にくればどりあやなや春のあまることしも

夏

更 衣二十三日

散る花の雪をたためる夏ごろもかへても春のなごりやはなき

卯 花二十四日

咲き出づるをりしもあかず卯の花は月なき程の庭のひかりに

待 郭公二十五日

ほととぎす心のまつのみさをにもくらべ苦しき聲のつれなさ

聞 郭公二十日

さめはてぬ曉やみのひとこゑは夢にまさらぬほととぎすかな

郭公稀 二十七日

うとくなるおのが鳴く音も色みえは青葉の花の山ほととぎす

故郷橋 二十八日

住みすてし昔もとほくふる里のぬし知らぬ香に匂ふたちばな

早苗 二十九日

せき入るる山下水の木がくれや雨待ちあへずさなへとるらむ

五月雨 閏三月初日

梢にも魚もとむべくそなれ松なみにしづめるさみだれのころ

鶺鴒 川 二日

かはぞひの柳にすぐやかがり火の影もみだる鶺鴒舟なるらむ

叢 螢 三日

朽ちはてむ後こそあらめ草の上の螢やなにのもえてゆくらむ

夏 草 四日

あげまきのはなち飼ふ野の夏深みかくる草の蔭をうしとや

夏 月 五日

照りそはむ紅葉は知らず秋風も月のかつらはまたぬすすしさ

夕 立 六日

にはかにも波をたたへしにはたづみかわくもやすき夕立の迹

杜 蟬 七日

夕日木がくれて朝夕蟬にさすこずるの露に鳴く蟬のなみだほしあへぬ衣手のもり

夏 祓 八日

今日のみの夏は人まね麻の葉を瀬瀬にながして御禊すすしすしも

秋

早 秋 九日

すゑつひに身にしむ色の初しほや衣手かろき今朝のあきかせ

七 夕十日

ひととせをなかに隔ててあひ見まくほしの契や思ひつきせぬ

萩 風十一日

かげ高き松に吹くだにうづもるる軒端の萩のあきかせのくれ

萩 露十二日

この宿に移し植ゑても萩の戸の露のひかりは似るべくもなし

女郎花十三日

白露のかざしの玉のをみなへしよそひことなる花のおもかげ

夕 蟲十四日

やどりする誰れをまつむし草深きまがきを山とゆふぐれの聲

夜 鹿十五日

あまをぶねよるの袂をぬらすともさして知らずや小男鹿の聲

初 雁十六日

ふるさとを秋しもよそにわかれきて雁の涙やそらにしぐるる

秋 夕十七日

眺めこしいくよの秋のうさならむ我れとはなしの夕ぐれの空

山 月十八日

吹きのこせかかろぞひかりさしのぼる月のなかばの山風の空

野 月十九日

やどりけり月も花野の露わけて家路わするるくさのまくらに

河 月二十日

月ぞすむ船さしくだすかはなみのよるの雨きく音もさながら

江 月二十一日

刈りはらふ手にまかせてや蘆間にもみかく玉江のなみの月影

浦 月二十二日

浦人のゆふべあかつきゆく舟に浪路をかへてつきや見るらむ

籬 菊二十三日

見^秋し春もまがきの蝶のゆめにしていつしか菊にうつる花かな

擣衣 二十四日

うつも猶きく人よりは夢や見るふけてきぬたのしばし音せぬ

曉霧 二十五日

さだかにももりくる鐘の聲ながら明けぬ夜ふかき峯の八重霧

岡紅葉 二十六日

染めあへぬ枝も手ごとに折り盡す往來の岡のみぢ葉は惜し

瀧紅葉 二十七日

となせ川水のおもには散らぬまも紅葉をくくる瀧のしらいと

九月盡 二十八日

今日ばかりいかでとどめむまた來むはおもふに遠き秋の別を

冬

初冬 二十九日

秋風の音をもさらに吹きかへてまたおどろかす冬は來にけり

時雨 四月初日

夕まぐれ聞きまがへつる松風のやがてもさそふ小夜時雨かな

落葉 二日

そめ染めすつひにあらしの末の露もとの雫と散る木の葉かな

朝霜 三日

霜なれやひかりをさまる有明のことわり過ぎてさやかなる影

寒草 四日

冬枯の草葉にも見よ色といへば千種ながらにあだの世のなか

千鳥 五日

波かくる袖のみなどの風をあらみ騒ぐ千鳥やよるかたもなき

水 鳥 六日

見し秋のにしき絶えたる川浪にかさねて浮ぶ鴛鴦の毛ごろも

氷初結 七日

照る日にもなほ絶えざりし山水の音こそ聞かね今朝や氷れる

冬 月 八日

見るひとの袖さへこほる小夜風(こよい)に落葉がのちの月のくまなき(くま)

鷹 狩 九日

暮るるをも知らずやわくる狩ごろもなほ心ひく鳥のおちぐさ

野 霰 十日

思ふぞよふる里遠き旅寐してあられ降る野にあられる身を

浅 雪 十一日

踏みわくる沓もかくれぬ今朝の雪をとふは思ふに浅き雪かは

積 雪 十二日

ちりそめてつもるを思へ怠らぬまなびなりせば窓のしらゆき

閑中雪 十三日

人を待つ心のみちのたえにしも雪ははらはむよもぎふのには

歳 暮 十四日

今日毎に過ぎゆく年を暮れぬとて身に驚くもいへばおろかさ

戀

初 戀 十五日

思ひたつこれぞあしもと遠くとも戀の山路のすゑも(まよ)たがふな

忍 戀 十六日

忍ぶとも見えじとしのぶ涙をばまぎらはさむも猶こころせよ

祈 戀 十七日

後水尾院御集 下卷

ねぎごとのしるしも見えぬ我が爲は神も諫むる道を知れとや

聞 戀 十八日

偽らぬ言葉としるに聞きあかずおくれしかたもさすが語るを

不逢 戀 十九日

終にいかにかまことの色を見はてむの重きかたには猶頼むとも

契 戀 二十日

もろ神をかけて契ればゆくすゑの松にはこえむ浪もおもはず

逢 戀 二十一日

たぐひなや逢ふ夜となればつらかりし人にもあらずとくる心も

別 戀 二十二日

急ぐなよもまたはこじこのたびや限と慕ふ今朝のわかれを

後朝 戀 二十三日

われこそは誘ひてかへる面影をあとには人のさしもとどめじ

遠 戀 二十四日

たちかへりとふとも遠きなか道に心のほかのよをやへだてむ

近 戀 二十五日

ひとやただ見だにおこせぬ我が宿の松とはさこそしるき梢も

馴 戀 二十六日

蚤衣なるとはすれど伊勢嶋やあはぬうつせはひろふかひなし

顯 戀 二十七日

うしや世の人の物いひさがなさままだき我が名ももれむとすらむ

増 戀 二十八日

神よいかにか聞き違へたる戀せじとはらへしままに増る悲しさ

偽 戀 二十九日

ことよきにはかられ来ては偽のしらるるきはを人にうたがふ

變 戀 晦日

後水尾院御集 下卷

つらくてもさらばはてじと變りゆく心をしひて頼むはかなさ

經年戀 五月朔日

さりともとなぐさめきぬる年月になかなかつらき恨をぞ見る

忘 戀 二日

千重ハイまさる霧や隔つるわががたの春日ヒイつもりて遠きたえまをヒイ

片 戀 三日

よしや人それにつけても思ひ知らば思はぬ方ヒイのよそにだにあれ

恨 戀 四日

おのづから見ゆらむものを恨むとも知らず顔なるそれも一ふし

雜

浦 松 五日

住吉ハイの松のみどりもなほそへて海士のいへだに菖蒲ふくらし

窓 竹 六日

なよ竹のなびきふしてはさみだれの雨闇からぬ窓のうちかな

山家嵐 七日

たへてやは深山の庵に聞き初めしその夜のままの嵐なりせば

田 家 八日

思へ世は玉しくとても秋の田のかり庵ならぬやどりやはある

羈 旅 九日

旅衣うちぬるままにふる里にかよふゆめ路はあしもやすめず

述 懷 十日

後の世のつとめのほかは事なくて物に紛れぬ身をつくさばや

懷 舊 十一日

みちみちの百のたくみのしわざまで昔におよぶ物はまれヒイにて

神 祇 十二日

後水尾院御集 下卷

頼むぞよ御裳濯川の末の世のかずには我れももれぬめぐみを

釋 教十三日

耳に聞き目に見る事のひとつだに法のほかなる物やなからむ

祝 言十四日

敷島（まげ）のこの言の葉になにごともまさきのかづら長きためしは

三十首

寛永二年孟冬之頃
式部卿宮御點

早春鶯

のどかなる日かげにうつる鶯や初音をしまではるを告ぐらむ
雪はなほ今朝しもさそふ風ながら春をたどらぬうぐひすの聲

朝霞

きのふ見し遠山まゆもかきたえて霞をのぼるあさづくひかな
音あれし夜の間の波のあさなぎに霞ややがて立ちかはるらむ

夕梅

誰がさとの春かせならし夕月夜おぼつかなくもにほふ梅が香
ひとしほのいろこそまされ紅のかきほの梅のはなのゆふばえ

紅はいかがと奉存候

庭春雨

後水尾院御集下卷

降るほどは庭にかすみしはるさめをばる軒端の雫にぞ知る

春の夜の眞砂地しめる沓のおとにおとなき雨を庭に聞くかな

見花
見る度に見し色香とも思ほえず代代にふりせぬはるの花かな
かくながらつくしはてばやつくづくと花に向へば思なき世を

聞郭公

待ちつくるただ一聲はほのかなれどさだかにも聞く郭公かな
郭公まつにいく夜をかかたも聞くにかひある初音ならずや

五月雨久

夕月夜ふり出でしままに有明のかげまでもらぬ五月雨のそら
ひととせも思ふにやすく暮るる日を心におくる五月雨のころ

水邊螢

せきかへし音にや立てぬ音羽川深きほたるのよるのおもひを

ほたるさへせき入れけりな流れきて遣水すすし河づらのさと

遠夕立

この里はくもりしはてす一村の雲もとをちのゆふだちのそら
この里は吹く風早みあまぐものよそに過ぎゆくゆふだちの雨

樹陰納涼

影ならぬ霜もまことに結ぶかと木の間をり月のすすしさ
たちぬるる雫もあかずかた岡や秋まつほどのもりのすすしさ

草花露

春の山もわすれにけりな百種の花野のつゆになびくこころも
百種の花といふ花の色ごとにはえあるものや野邊のしらつゆ

霧中雁

南をやさして來ぬらむ霧のうちの小車ならぬかりのつばさも
峯こゆるつばさは消えてくる雁のこゑのみちかき霧のうちかな

野鹿

聞き馴るる人やうからぬ小男鹿のつまとふ小野の夕ぐれの聲
女郎花なびくを見ても小男鹿の野をなつかしみ妻やこふらむ

深夜月

四方にみな人はこゑせでふくる夜の月ぞ心もさらにすみゆく
更け行けばやどかる露も數そひてところ得顔のよもぎ生の月

山紅葉

山づとに手折るを見れば庭の面の木木の千入は露のしたぞめ
もみぢ葉はいかなる露かおく山のやまより深き色を見すらむ

初冬時雨

見し秋のしぐれも今朝は色かへて木の葉ふりそふ軒のやま風
やがてこそ雪もさそはめ冬きぬるまなくしぐれて寒き山かせ

河水

かち人の朝川みだるあと見えて淺瀬たどらぬうすごほりかな
山川やもみぢ葉ながらとちはてしこほりもかくる水のしら波

連日雪

越路にはただ時の間に日數ふるみやこの雪のふかさをや見む
をれかへる枝より落ちて日數ふる後しもあさきまつのしら雪

浦千鳥

おのが妻まつはつらくも大よどの恨みわびてや千鳥なくらむ
夕波にたち行く千鳥風をいたみおもはぬかたに浦つたふらむ

夜神樂

笛の音も神樂の庭のおもしろく冴ゆる霜夜にすみのぼるらむ
漣浪のかずかずにしも三夜までに歌ふをあかず神や聞くらむ

忍戀

いかになほ人は見るらむ世のうきにいひまぎらはす袖の涙も
後水尾院御集下卷

身におはぬ思ならずばなほざりにつつみてましを袖のなみだも
不逢戀

あはじとは思ひ定めてつらくのみいひはなたぬを情にやする
よしさらば我れだに移れつれなさの人はかはらぬ心なりとも

待戀

ふけぬとや猶や待ちみむ宵のまはさすがえさらぬ障もやある
濡れてもし訪ひこばさてもとばかりに雨降る夜とて待たずしもなし

遇不逢戀

そのかみの憂身にかへれこのままに逢はずばありし夢を忘れて
このままにまたも逢はずば中中にありし一夜の夢ぞくやしき

恨戀

知れかしなことに出でてはいはずとも見ゆらむ物を下の恨は
もらさじなそれにつけてもつらからば中中ふかき恨もぞ添ふ

曉雲

いりぬべきそれだに思ふ山かづら月の行方にかからずもがな
小夜ふかきをのへの雲にもれ出でて曉つぐるかねのこゑかな

夜夢

思ふよりほかにやは行くよひよひに見る手枕の夢はかはれど
見しことをわたしもはてす明日よりのこれも侘しき夢の浮橋

霧中燈

ふる里に見し人ごとの面影のたびねとひくるともし火のもと
かりよらむ里もわかれず暮るる夜にみちしるべする灯のかげ

山家嵐

なほざりに世をいとひこし心こそみねの嵐はなほうかりけめ
よしや吹け山にてもうき嵐にぞ今ひときははおもひはなれむ

社頭祝

松の葉はちりうせずしてすみよしや守るもひさし敷島のみち
いのりおくいま行末もかぎりなく猶ふきとほせ五十鈴川かせ

辭案愚點三十首

智

仁

十首

故郷梅

のきふりてたちばなならぬ梅が香も昔しのぶの露やそふらむ

春曉月

風さえてかすみ吹きとく明方のかげしもをしき春の夜のつき

墻夕顔

卯の花は日數へだつる垣ほにもものこる色かと咲けるゆふがほ

擣寒衣

秋風の身にさむくなる山賤や暮るる夜ごとにころもうつらむ

野徑鶉

秋の野の古枝の眞萩かりにだに來る人なしとうづら鳴くらむ

庭初雪

庭の面は降るもたまらで眞砂のみしろきこずるの今朝の初雪

寄枕戀

逢ふと見る一夜ばかりの夢もあれな五十の枕それはおもはず

寄繪戀

これをだに見ざらむ程はとばかりにかきすさびしやえしも恨みぬ

橋上苔

おのづから柳やたふれむす苔のまほならずしもわたすかは橋

思往事

さまざまに見しよをかへす道なれや雨夜更け行く燈火のもと

後水尾院御集下卷

故郷梅 橋なれどむかし思ひ出でらるるつまなりとやらむ物語の詞おもしろく、言語道斷、殊勝のやうに拜見候。

春曉月 實に面白かるべき春の曉の一刻、風景無限候にやと存候。

墻夕顔 卯花の残るかと思ゆる垣ほの夕顔、めづらしく拜見候。

搦寒衣 本歌の心も髓に、心詞誠にありがたく、無比類様に令存候。

野徑鶉 彼のかりにだにやはといひひけむふることを、萩にとりなされ候。尤珍重に存候。

庭初雪 はつ雪のおもかげまことに眼前に如見候歟。又第三四の御句しるき楢とつづげられし文字うつり、殊勝珍重の様に拜見候。

寄枕戀 故事をやすらかにとりつづげられ候。是亦絶言語候。

寄繪戀 また物語の心詞凡慮及びがたき様に存候。

橋上苔 心めづらしく詞つよく、しかも縁語おのづから出あひ、殊勝珍重の様に存候。

思往事 雨夜の燈下、まことに思ひ残す事もあるまじき折からにや、

夜半燈前十年事とさしつめ候よりも、ことのほか幽玄なるやうにやと令存候。

條條憚をかへりみず言上候事、其恐不少候。誠に冥慮もおそろしきことながら、管見の莠言卑下もなかなか物に似候歟之由令存候ばかりに、無正體事共書付候へば、又似物候歟。しかるべきやうに御とりなほし候て、唯一わたり御前によみ申され、ひきやらせおはしまし候て、よろづの罪をかくされ候やうに御心得候て、申給ふべく候。かしく。

みち村上

十首

早春霞

雪げにもくもりなれにし山(ぬる雲イ)ながら春のかすみは色(のイ)もまがはず(ぬイ)

静見花

後水尾院御集 下卷

ことしげき世をも忘れつつくづくと心をわけぬ花にむかひて

野郭公

聞き初めてあかぬ野中のほととぎす見おくる程ぞ空に久しき

海邊月

須磨明石すむらむ影もみるめなき我が身を浦のなみの上の月

山紅葉

分け入れば麓にも似ずもみち葉の深きやふかき山路なるらむ

關路雪

しらくものいづこか家路降る雪にすすまぬ駒のあしがらの關

忍待戀

忍ぶれば嬉しきものの小夜ふけて人はねたるぞ待つに戀しき

稀逢戀

つひに身の契なれとやたとへても浮木の龜のあふせばかりを

旅宿嵐

たのみこし夢路もたえて草枕ふるさととほく吹くあらしかな

社頭祝

いはし水ながれの末の我が末も神しまもらば世世に絶えじな

十首

不知夜月

雨もよにうしや名だたる昨日といひ今日だに晴れぬ不知夜の月

翫月

いひしらぬ色にもあるかな何事か何のむしろか月にはえなき

松間月

雪見むとひき植ゑし松も秋を経て木の間少なき月にくやしき

月前鹿

もろ共に山より出づるてし小男鹿やいるかた見せぬ月に鳴くらむ

月前雁

はつ雁もこゑをほにあげて慕ひきぬ天の戸わたる月のみ舟を

都月

見よや見よ都のふじの空はれて月もうへなきあきのひかりを

嶺松月月

かげうつす月のかつらの初紅葉くるる尾上のまつにもりくる

水郷月

秋の月いづくはあれど川づらの宇治よ伏見よいかにすむらむ

寄雲戀

晴間なきならひよいかに雲ならぬ戀はむなしき空にみちても

寄月祝

月よみの光あまねく照らすてふ國も千五百のあきはつきせじ

十首 慶安二年六月二十五日聖廟御法樂

雲外郭公

一聲も聞くやいかなる白雲のうづむこすゑのやまほととぎす

濱五月雨

五月雨は波ぞあらさむはまびさし久しくなりぬ晴れぬ日數も

船納涼

こぎゆけば秋なき波に來ぬ秋もまだきおぼゆる船のおひかせ

杜夏祓

かねてより月さもうつろふかはなみにみそぎ涼しき神なひの森

憑戀

ただ頼め頼むにつけてさすが人えもつらからぬふしも交らむ

顯戀

霜の後まつこそうけれつれなきの色も變らぬなげきせしまに

隱戀

常夏のはかなき露にあらし吹く秋をうらみのそでやひがたき

澗松

咲きてとく散らぬためしぞ光なき谷にやあひにあひおひの松

晚鐘

思へただ鐘こそかねておどろかすこの夕露の消えやすき身を

述懷

いかにせむいへば誠の道ならぬ道のねがひもたちがたき世を

十首 慶安五年正月朔日御試筆

處處立春

誰が里も漏れぬめぐみの光よりおのがさまさま春をむかへて

遠山霞薄

今朝はまづそなたにうすき山眉の遠きやかすむ色を見すらむ

水邊殘雪

うちいでむ浪にはとほき花の色や谷のこほりに残るしらゆき

梅近聞鶯

梅が香もこゑのほひもくからぬおし明方の窓のうぐひす

柳先花緑

春はまづ靡く柳もみやま木の花にならはぬみどりをやおもふ

忍尋戀

このさとの道しるべには頼むとも人にしのぶの奥は知られじ

人傳恨戀

人づてはうしろめたしや憎からずおなじ恨もうちいでてこそ

山家客來

ことよせてとひ來るもうし（イ）柴の月（イ）山すみの心のほか（イ）句（イ）花かま（イ）の花やもみぢ（イ）に

飛瀧音清（イ）

雪とくる今朝からことにおとそふや春をしらぶる山の瀧津瀬

霜鶴立洲

おのが上にかさねむ霜をいくよとも知らず白洲のつるの毛衣

十首

慶安五年六月二十五日聖廟御法樂

朝霞

嵐吹く松もひとよの春にあげて霞むひかりやあけのたまがき

山櫻

もろこしもよしや芳野の瀧津波かかるさくらの花をやは見む

郭公

あま雲のよそに過ぎ行く郭公見るよりも聞くこゑはさだかに

萩露

またや見む雪ならぬ露にみだれあひて薄おしなみ靡く萩が枝

夜鹿

あづさ弓ひくまの野邊の小男鹿もよるこそまされ妻戀のこゑ

時雨

ものごとにさだめなき世を思ふにも袖の外なる時雨のみかは

忍戀

今こそは忍ぶもちずり誰れゆゑと亂れて遂に知られむもうし

久戀

年月は思ひ知るらむいかにもいはじ岩木のみさをつくりを

驕旅

故郷のたよりと聞けばふみかきてつくさぬほどの思をば知れ

山家

山里も時につけたるうさはあれど憂世のうさに似るべくもなし

十首 承應二年正月朔日御試筆

嶺上霞

峯たかき春のひかりをさしそへて霞むあさ日の色もめづらし

餘寒月

冴えかへる空にはくもる月影のそれかとまがふ雪ぞつもれる

梅薫風

世は春に咲ける咲かざる里はあれど梅が香ならで吹く風もなし

歸雁

なごりあれや翅は消えてゆく雁の聲を雲井にかすみのこして

山家花

わりなしや花咲くころは柴の戸を道とはぬもとはるるもうき

忍戀

今さらに山たちばなの色に出でばつづもる月日も人は知らじな

不逢戀

動きなく思ひ定めて中中に逢はじともいはで逢はじとやする

朝眺望

時知るや都のふじの春のゆきかのこまだらに今朝は解けつつ

旅宿夢

草枕あらしもなれてふるさとはとほざかりてぞ夢に見えける

獨述懷

ともかくもなさはなりなむ心もてこの身一つを歎くおろかさ

十三首 慶安元年九月十三夜

九月十三夜

名にしおふこよひ一夜にとばかりも見し長月の影をしぞ思ふ

月前星

知らず誰れ星を挿頭に月をおひてここも藐姑射の山をとふらむ

月前時雨

しばしなほ曇ると見しぞ光なるしぐれの雲にもるるつきかけ

月前萩

かかる夜の月に夢見る人はうしといはぬばかりの萩の音かな

月前鹿

つまごひをなぐさめかねて姨捨の山ならぬ月に鹿や鳴くらむ

花洛月

春によせしころのはなの都人もうつろふ秋の月や見るらむ

古寺月

古寺の菊もみぢも折りちらし汲むあかつきの影ぞ身にしむ

寄月忍戀

うちとけて見えむはいかがくまもなき月は心の奥も知るらむ

寄月變戀

もろともに見しよの月の光までおもがはりするこの秋はうし

寄月別戀

人もかくおくらましかばかへるさの月は身に添ふ今朝の別を

寄月述懷

世をなげく涙がちなる袂にはくもるばかりのつきもかなしき

寄月旅泊

漕ぎいではあすの浪路もこととへよこよひの月はみつの泊を

寄月祝言

みちぬべき月に思ふも行末を待つことつきぬたのしみにして

仰の趣うけたまはりぬ。此題人のげざんに入候まま、あそばし候由にて、

拜見を許され候。かしまり入候。さてもさてもとりどりの金玉ども、中
 中言葉もおよばぬ御事どもと、あり難く存候。今宵一夜に季秋のなごり、
 一入惜むべき事にて候。就中こよひは清光にて候べき空の體に見え候。
 星をかざし、故事にて候やらむ、不覺悟候へども、言葉つよく、まことに及
 びがたき體とも申ぬべくやと存候。時雨の雲にもるる月、一入の光輝を
 添へ候べき事にて候。いはぬばかりの萩、言葉のほかに其心あらはれ、餘
 情かぎりなきとも申ぬべく候歎。妻戀をなぐさめかねて、嫉捨ならぬ山
 に鳴く鹿、思ひよりがたき御事にてや候べからむ。春によせし心の花、物
 語の詞の面影候にや。菊も紅葉も折りちらし、是また雲林院の體おもひ
 出でられて候。月は心のおくも知るらむ。心詞またありがたく拜見候。月
 の光までおもがはりする心の秋、誠にさる事にて候べきと存候。おくら
 ましかば、わりなき別の體、無申計候歎。なみだがちなる袂には、くもるば
 かりの月も、かなしき心はさるものにて、御詞のつづき、まことになまみ
 なく、心にまかせていひくだされ候とは、かやうの御事にやと推量申候。

あすの涙路もことへよと候て、今宵の月はみつのとまり、妖艶の體に
 て候やらむ。みちぬべき月に、行末つきぬたのしみ、かへすがへす言の葉
 のたれもつきせぬ御事と、空にあふぐばかりにて候。感歎の心にひかれ
 て、秀言殊のほかしげくなり候。そのままにてはなほなほ憚多くやと存
 候へども、拜見の間、御使まぢまゐらせ候。ことのほか程を経候やらむと、
 御わたくしまで見参に入候。くるしからず候はば、そと御披露候て、すな
 はちやらせおはしまし候へ。かしく。

通村 上

七夕七首

寛永十六年七月七日禁中御會

七夕月

天の河ながるる月もこころしてまれの逢瀬にひかりとどめよ

七夕河

後水尾院御集 下卷

なき戀ふる涙のかはに織女のたへてみるめも今日やかるらむ

七夕草

うくらむも知らずや星のたむけぐさこの七種は花もまじらす

七夕鳥

かへまくもほしの契よおのがうへに思へばをしの獨寐の夜を

七夕衣

たなばたの衣のすその秋かせにうらめづらしく重ねてやぬる

七夕別

いかにまた汀まさらむ天の河今朝しもかへるなみのなごりに

七夕祝

ほしあひの空にくらむ君も臣も身をあはせたる代々の契を

重陽九首

寛永十六年重陽

菊映月

ひかるとはこれやまがきの秋の菊月にはえある花のてこらさ

菊帶露

をりにあふ今日のかざしよ飽かず見し萩の下葉のつゆの白菊

菊似霜

菊はいま咲きも残らぬ花のいろの霜やまことの霜を待つらむ

山路菊

つゆの間に十とせあまりの菊ぞ咲く大内山もやまちおぼえて

河邊菊

吉野川はやくのとしをかへさめや菊のしたみづ老はせくとも

寄菊契

月草の露もなかけそ我がなかのちぎりはかれぬ菊をためしに

寄菊恨

木枯の宿すぎがてに手折りしも菊はうらみのあさからめやは

寄菊旅

梅が香をふれし衣にあきの菊かさねてにほふたびをしぞ思ふ

寄菊祝

ももしきや代代のむかしにかへる日をとれそへて酌め菊の盃

二十首

延寶四年秋御寐覺被遊御詠御年八十一

春曉月

梅が香のゆめさそひきて曉はあはれさも添ふつきを見よとや

獨見花

われのみは花のにしきもくらぶ山まだ見ぬ人に手折るひと枝

風前花

あひ思ふ道とも見えす風のうへにありか定めず花はちりのみ

惜殘春

花鳥にまたあひ見むもたのみなきなごりつきせぬ老が世の春

歎冬露

ことに出でて思ひなぐさめ山吹のいはぬ色しも露けかるらむ

雨後郭公

心あれや雨よりのちの一聲はものにまぎれず聞くほととぎす

樹陰避暑

秋とこそいはねの清水流れ出でて木蔭に夏の日をくらしつつ

萩風告秋

萩の聲ひとりさやけし鳴く蟲もおのがさまざま秋を告ぐれど

山月

うらみじな山の端知らぬ武藏野は草にかくるる月もこそあれ

月前雲

後水尾院御集 下卷

もれ出でていまひときはの光そふ雲にぞ月は見るべかりける

栽菊

知らず誰れ秋なきときと契りおきて植ゑし砌の花のしらぎく

擣寒衣

思ひやる旅寐の夢もかよふらしうつやきぬたの音もさむけき

冬曉月

冴ゆる夜のすむ月ながら影しろくあかつき深き雪にまがひて

落葉

朝日にもそむるばかりに夜半の霜とけわたりたる落葉色こき

寄月戀

見るたびにそのよの事ぞ思はるる月ぞわすれぬ形見ながらも

寄雲戀

うしいかぢむ心のやただ人のあぐもいのころも白雲のへだてぬなかと思はましかば

寄雨戀

我が袖の涙くらべば秋ふかくしぐるる木木もいろはまさらじ

寄風戀

心あらばうはの空なる風だにもこのひと筆を吹きもつたへよ

海路

知る知らずここぞ泊とこぎよせてかたらひなるる舟の路かな

釋迦

散りうせじたただ我れひとりはとばかりも説はきし言葉の花の匂は

雑 雑 次第不同

海邊霞

昨日まで汀にさえし松かせも今朝はかすみのうもれぎにして

松間花

あらましきかせこそうけれ咲く花にまじへても見む松の緑を

曉郭公

人ならばうらみもはてむ曉のそらだのめせぬほととぎすかな
をしむらむ人におもへばなきくるを待ち得て聞くもうき子規

江上月

なにごとを思ひ入江の月なればなぐさまなくに袖しぼるらむ

野外萩

誰れとはぬ恨もひとりほに出づる聲もさびしき野邊のをぎ原

夕千鳥

なきかはす友もなきさの濱千鳥ひとりしをるる聲のかなしさ

忍久戀

色に出でばおもひしるらむ年月を心にこめしほどぞくやしき

恨絶戀

年月は聞きいれもせでひとことの恨にたえしなかぞかなしき
かかれとてつくりや出でしひとことの恨に添へて絶えし契は

夜述懷

何ごとを思ひつづけてかくまでは寐ぬ夜ぞつもる涙なるらむ

社頭祝

八幡山いすなやそぢにあまる身ながらになほも願のたまぞつきぬかなしさ
いかでなほめぐみにあはむ神やしるかけて祈りし心ひとつに

神 祇

手向くるもかけし言葉のつたなさよせめて哀と神ならばこそ

野 寺後三首題開歎

鐘のこゑよそに聞きてぞ歸りゆく身もいつかはの野邊の夕露
うち渡すこの川端のながき世にあかすこそ見め月にあかして
またいつとちぎらざりしを思ふには暮るる夜毎の心みむとは
ひとへなる雪にもしるしものごとに見そむるとききの深き心は

早 苗

植ゑわたす田子のもすそもぬれけらし水を心にまかせたる時

紅 葉

今朝はまた千入の上におきそひぬ紅葉にあける霜やなからむ

春 山 田

あらそはであらす山田のくろなれやこぞのままなる

鶯

日影よりまづ咲く梅にうぐひすのおのが初音も花に待たるる

野 外 蟲

踏みわけし跡とも見えぬ野の末に誰れをまつ蟲聲なつくしそ

題 不 知

よはかくぞ花を惜みて見しもいま散りゆくあとに残る人なし
まとゐしてかたらふ人の情まで花に添へてもえこそ見すてね
しかな刈りそ萩刈るをのこ一本はかざしに残せ野邊の歸るさ
これをだに人に見えむもつつましきやそぢの後の敷鳥のうた

右一首一本題延寶七年正月御試筆御年八十四

面影はたださながらにひと言もかはさでさめし夢ぞかなしき
さだかなれどはつか餘に見し月をまたも見つがぬ夢ぞ悲しき
現とはおもほえなくにさりとてもさむるときなき夢ぞ悲しき
ほととぎす待つ夜は聞かむ夢もなし花人もこずるのなつふかきやどちる里の月のみじか夜

つくづくとふみにむかへばいにしへの心心の見えてかしこき
 山もまた今朝はかすみの薄衣うらなくはるのいろや見すらむ
 海原やしほどき急ぐ朝ぐもりやがて立ち添ふかすみなるらむ
 松風も春のうぐひすさへづれるしらべを添ふることさらの聲
 心あらば吹きな散らしそ春風の手にかかせる梅のほひを
 ふる里にいそぐ心や春の夜をあかしもはてずかへるかりがね
 ゆふ霞そこともわかぬ高根より月吹きいだすあらしさやけし
 奥ふかき山風さむみたちかへり昨日わけこしはなやたづねむ
 遂にうき名にこそたつの市ならめ身を一つだにうる事なし
 よる浪も音きく袖のかかるかとゆふべ涼しきかはづらのさと
 羨し身にこそ知らねなにごとをまつとせしまの老木なるらむ
 せめてさはものいひかはせ老が世は月より外の友しやはある
 人心かはらばわれも絶えねただよしさて戀のやまつくるとも

はし鷹のすすの篠原かりくれていり日の岡にきぎす鳴くなり
 五本の柳はあやな朽ちはてて朽ちせぬ名のみのこるふるさと
 身をしをるならひよいかによやはうき人やはつらき秋の夕暮

九月の末つ方思ひもあへず倚盧に移ろひしは
 ただ夢の中ながら覺むべき方なき悲しさに佛
 を念じ侍りけるついでに「諸法實相」といふ事を
 思出でて句の初におきて拙き言の葉をつづり

聊か愁歎の思をのべ侍るならし後陽成院崩後
御迫善の御製

しら雲のまがふばかりを形見にて煙のすゑも見ぬぞかなしき
 よそへ見るたいたぐひもはかな朝顔の花の中にもしをれやすきを
 ほし侘びぬさらでも秋のつゆけきに涙しぐるる墨のたもとは
 うつつある物とはなしの夢の世にさらばさむべき思ともがな
 知らざりきさらぬ別のならひにもかかる歎をきのふ今日とは

つかふべきみちだにあらば慰めむ苦苦イのしづくを袖にかけても
さまざまに移り變るもうきことは常なるものよあはれ世の中
うけつぎし身の愚さに何の道も廢れ行くべき我が世をぞ思ふ

秋神祇

いなばにやあまる惠の露ならむあまたの神にたつるみてぐら

初戀

おもひ川わが水上のゆくすゑや底ひも知らずならむとすらむ

憶牛女言志

今宵あふふたつの星のやどりとる空にくらぶの山をかさねむ

代牛女述懷寛永十五年七夕御會

世はなにの道もかへらぬむかしには逢瀬まれなる天のかは波
星合の空にもさぞなものとにあくとき知らぬ人のおもひは

草花露

花の上の露はひとつをいかにしてまだき千種の中に咲くらむ

戀一本且見花

わすられぬ思はさしも淺からであさかの沼のくさの名もうし
思のみしるべとならばたのめただ哀あやなき今日のながめも

秋旅

おもひやれ床は草葉をしきわぶる旅寐のあきの露のふかさを

菊送多秋

馴れて見む秋を思ふもひさかたの雲井ににほへはなのしら菊

首夏

夏きてはころもほすてふ白雲のかさなる峯のかげぞすすしき

故郷橋

ふるさとの軒端に匂ふたちはなやむかし忍ぶの露を添ふらむ

深山鹿

鹿の音に立ちならびてもかたはらの深山木ならぬ木木の色哉
鳴く鹿のこゑにぞこもるおのが住む山より深き秋のあはれを

月前雁

千里にもくもらぬ月のひかりより雲路たどらぬ雁や來ぬらむ

花満山

雪かともあやまたれけり吉野山みねにもをにも咲く花を見て

社友花

おのづから宮守る袖となりにつけり忌垣の花に馴れてきぬれば

花浮水

ゆく春もしばしが程はとどまれよ花のながるる水をせきなば

鷹狩

はし鷹に心いれてやかり衣かせも寒からすみちもとほからず

柳先花緑

いとはやもみどり添ひゆく柳かな花は木のめの春と見しまに

試筆

なべて世の花の春たつ今日よりや錦と見ゆるかすみなるらむ

曉郭公

ほととぎす誰れとひすてしうらみさへ知らで待ちとる曉の聲

夕千鳥

さそはれておのが立居もひまぞなき夕浪千鳥かせのまにまに
をり添へて手向くる今日の撫子の形見と見るもいとど露けき

待郭公

高砂の尾上ならでもほととぎす待つは久じきものとかは知る

内閣文庫藏本奥書

右後水尾院御製也花園宰相實滿卿依書寫之本寫之者也

後水尾院五十首和歌

延寶五年正月

山早春

山もまた今朝はかすみの薄衣うらなくはるのいろや見すらむ

海上霞

海原やしほときいそぐあさぐもりやがて立ちそふ霞なるらむ

松鶯

松風も春のうぐひすさへづれるしらべを添ふることさらの聲

梅風

心あらば吹きな散らしそ春風の手にまかせたる梅のほひを

故郷柳

五本のやなぎはあやな朽ちはてて朽ちせぬ名のみ残るふる里

五十首和歌

二八一

夜歸雁

故郷にいそぐこころや春の夜をあかしもはてず歸るかりがね

峯春月

ゆふ霞そこともわかぬ高根より月吹きいだすあらしさやけし

尋花

おくふかき山風さむみ立ちかへり昨日わけこし花やたづねむ

見花

見てのみや見ざらむ人にとばかりもさすがにをしき花に暮して

落花

世はかくぞ花を惜みて見しもみな散りゆくあとは残る人なき

春山田

あらしそはで荒す山田のくろなれや去年のままなる薄かるかや

岸藤

ことさらに舟よせよとや岸かげをおほへる松にかかる藤なみ

新樹

いかなれやさしもの花の目うつしに心もうつる木木の若葉は

聞郭公

ほととぎすほのかなりけるひと聲を遠方人はさだかにや聞く

早苗

植ゑわたす田子のもすそや濡れけらし水を心に任せたるとき

夏月

涼しさをまちいづる影にくまもなき秋もおもはぬ夏の夜の月

夏草

かげたかく繁り添ひたるなつぐさに春見し野邊の面影もなし

夕立雲

にはかなる雲風はやき夕立の晴るるもやすきあめのすすしさ

納涼

よる波も音きく袖にかかるかとゆふべ涼しきかはづらのさと

草花

秋の花にこころとられてとぶ蝶も宿りかねたる羽よわけなる

野外蟲

踏みわけし跡だに見えぬ野の末にたれをまつ蟲聲なつくしそ

岡鹿

おのが妻待つ夜むなしく小男鹿の岡の葛葉のうらみてや鳴く

浦秋夕

絶えず立つ苦屋のけぶり色なきも淋しきいろか秋のゆふぐれ

月出山

山の端の松をはなれてさしのぼる月のみかほに似る時もなし

橋月

うちわたすこの川橋の長き夜もあかずこそ見め月にあかして

關月

明けわたる波路はのこる月もなし清見が關の名のみとまりて

擣衣

波風の夜さむもしるくころもうつつ聲しきるなり川づらのさと

秋時雨

雪のうちの梅にもうつせ心とくあきのしぐれに染むる紅葉は

殘菊句

心してなほのこりけるにほひかな菊より後のはなもなきころ

紅葉

今朝は又ちしほの上におきそへぬ紅葉にあける霜やなからむ

暮秋

百ぐさも秋のかたみにおく霜のひとつ色にし枯るるさびしさ

朝木枯

月は猶あしたの雲にかげとめて木の間さやけき嶺のこがらし

寒 蘆

霜しろく枯れたる蘆（つゝ）に鶯鳴のまじるつばさは繪にかかまほし

河千鳥

河風にさそはれわたる小夜千鳥立居もしるく鳴きかはしつつ

初 雪

ひとへなる雪にもしるしものごとに見そむるときの深き思は

深 雪

踏みわけて今朝のまを（おもふ心）にはつもれる雪も淺しとや見む

鷹 狩

にはかなる狩場の小野の白雪につき尾の鷹もふりまがへつつ

炭 竈

としさむき松よりおくにこの頃はけぶり立てそふ小野の炭竈

忍（しの）久戀

くやしきもいはで過ぎにし年月をしられば人も思ひこそ知れ

待 戀

今宵もやと思ふばかりを頼にて更けゆく鐘も誰れにかこたむ

別 戀

またいつと契らざりしを思ふには暮るる夜ごとの心みむとや

顯 戀

顯ればいかにせむともおもほえずとてもかくても同じ憂身を

恨身戀

思ひとけば人にもみつくことわりに身より外には誰れを恨みむ

舊 戀

おもひやるころの道もかひぞなきふるき枕は夢もかよはで

松積年

羨し身にこそ知らねなにごとを待つとせしまの老木なるらむ

巖 苔

むかしたれ世世へて住みしあとならむいはは苔むし松高き蔭

鶴立洲

へだてなくすすききの友も呼びかはし語らひなれよ和歌の浦鶴

名所市

遂にうき名にこそたつの市ならめ道ひとつだにうる事もなく

野 寺

鐘の聲よそに聞きてぞかへりゆく身はいつかはの野邊の夕露

神 祇

手向くるもうけし言葉のつたなさをせめて憐む神ならばこそ

後水尾院御著到百首

春二十首

立 春

あづまより立ちくる春ものどけさは雲居のそらや始なるらむ
立ちかへる花のこのめの春かせは若みづむすぶ袖よりぞ吹く

朝 霞

起き出でてむかふ外山の朝な朝な近くてとほく霞むころかな

谷 鶯

うぐひすの古巢ながらの初音にて谷にも春のありけるものを

残 雪

御著到百首

冴えかへる空まちいでて春ふるや空のあなたにのこるしら雪

若菜

ながれくる浅澤水のうすごほり若菜もとめて誰れも摘むらむ

里梅

初瀬風なほ吹きかよへ三輪のさと杉の木の間も梅にほふなり

軒梅

をらねども飽かぬにほひのおのづから袖に重なる軒の梅が枝

春月

空もいまおぼろに見ゆる春の夜は月のかつらの花ぐもりかも

春曙

いへばえにあはれぞ深きいろ見えぬながめをつくすばるの曙

歸雁

秋風にさそはれそめしかりがねや歸る越路にまたいそぐらむ

春雨

なかぞらにあそべる絲と見るほどにさすが曇りて春雨ぞ降る

岸柳

春かせの吹きなびかせる青柳はきしねの草ぞみだれあひぬる

待花

ひとはるの心がへする花もがな待つにつらさを思ひ知るやと

初花

咲きつがむ野山の春はありぬともただ一枝のにはのはつはな

あくがることわり知りて咲きそむるいはもと櫻岩木とはなし

見花

かげしめてわが深山木のいかならむ花に心はうつしはてにき

花盛

たちかへり花は待たれぬものとしも思ふばかりの盛をぞ知る

落花

あやにくに散る花ならばこころみよ散るも惜まじ風も恨みじ

欸冬

露ふかく枝もまがきもとををにて八重咲きうづむ山吹のはな

池藤

かげうつす池のみぎはの藤咲けば風にまかせぬ波ぞ立ちぬる

暮春

とにかくに暮れゆく春の程なさは彌生くははる今年にぞ知る

夏十五首

更衣

あかざりし心を見えは夏ごろもさくらがさねぞしたに匂はむ

卯花

卯の花の光もそれとまがひけり影見えぬ月の名にしおへども

待郭公

めづらしとなほ聞きそめむ郭公またでももらす忍びねもがな

聞時鳥

くらべては花ももみちもはつごゑのいろにとられむやま時鳥

故郷橘

たれかそのいまを忍べと故郷に植ゑていく世の軒のたちばな

郭公稀

はつ音きくころには過ぎてしたはれぬ鳴きすがりての山郭公

早苗

幾里のおなじ早苗もとりどりに小田の植女の手ぶりわくらむ

五月雨

はらへども雲のいくへに空とちて風のとめぬ五月雨のころ

鶉河

かがり火に焼きもけたずば鶉飼船迷はむ罪の身をつくさめや

螢

草むらに露はこぼるる風のうへにうきて螢のかげぞみだるる

夏草

ゆくかたになかなか道ぞたどられむ野すぢをかへて結ぶ草村

夏月

つくづくと見てこそ月は惜まるれあまりはかなき夏の夜の空

夕立

なるかみの音をそなたと聞くうちに峰越す山のゆふだちの雨

杜蟬

あつき日はさだかに鳴かぬ蟬の聲杜のこすゑの露かわくらし

夏祓

はらへつつうき世は人にかはれどもみたらし河のおなじ行末

秋二十首

早秋

今朝よりは秋ぞきにける白露のたままつが枝の色も知られて

七夕

秋の夜の千夜をひと夜になしもして星の逢瀬の中にかさなる

萩風

さびしさをたへぬものゆる庭もせに誰れ植ゑおかぬ萩の上風

萩露

よしさらばおつとも折らむ萩の露おきそふ秋の袖にまかせて

女郎花

すさまじき旅寐ともなし女郎花おはかる野邊の草のまくらは

御著到百首

夕 蟲

くれそむるさ山のこすゑ吹く風のとだえもおかぬ松蟲のこゑ

夜 鹿

目もあはぬ寐覺にたぐふわが友と知らじ妻とふ小男鹿のこゑ

初 雁

おのれしもよむ玉章かはつかりの聲ほのめかす雲のうへには

秋 夕

いつよりの涙もろさぞうきものと知らぬ夕のあきもありしを

山 月

吹きはらふ雲はあらしの光にて月の名たかしさらしなのやま

野 月

むさし野も山はありけり出でてゐる草の葉末の月におもへば

江 月

秋風にうす霧はれて蘆の葉のなびけばうつるなには江のつき

河 月

よし野川はなは岩にもせかれけり行くかげとめよ秋の夜の月

浦 月

見るままに更けゆく影をさそふかと月に恨やおふのうらなみ

籬 菊

わけつくす野邊を砌のませのうちも菊ぞ千種の花に咲きぬる

擣 衣

小夜かせにもよほされてやうつ音もきてくし身にしめる秋の狭衣

曉 霧

あかぼしの光ばかりはなほ見えて秋の夜さむしうす霧のやま

岡紅葉

つゆ待たぬいまひとしほは夕づく日さす片岡のもみぢ葉の上

瀧紅葉

下紅葉およばぬ枝はたきなみのをられぬ花と見てやかへらむ

九月盡

なが月の名のみばかりをかたみにて今宵を秋としたふ空かな

冬十五首

初冬

冬きぬとむべ山かせもひときはの嵐のおとも今日ぞときめく

時雨

朝まだきうきてただよふ半空の雲はいづれかまづしぐるべき

落葉

むらごにぞ染めなしけりな亂れ散る真砂のうへの風の落葉は

朝霜

夜のほどの手枕ならす風冴えて篠の葉しろし今朝のあさしも

寒草

つつまれし野中の水のたえだえにかけあらはれて残るふゆ草

千鳥

さそふよりさそへるかたにうち群れて心もおかぬ友千鳥かな

水鳥

これもまた翅ならぶるちぎりかなつがひはなれぬ池のをし鳥

氷初結

せきいれし岩根の水やこほるらむ昨日にも似ぬ聲むせぶなり

冬月

木木はみな落葉の後も嶺にのこる松こそ月のさはりなりけれ

鷹狩

疲れても今ひとよりははし鷹の物なしてふを聞きすてめやは

野霰

草かりのかよふ道にも野をさむみ冬風吹けばあられたましく

朝雪

跡つけばうしともおもふ踏みわけてとふばかりなる雪の朝に

積雪

目にたたぬ山もあふげば空たかく雪におどろく尾上とぞなる

閑中雪

なべていま四方のあらしもをさまるや雪のためしの九重の内

歳暮

せめて身にくれぬるとてやゆく年をわするばかりの營はせむ

戀二十首

初戀

人やりの道ならなくに戀の山わけいるよりもすゑのくるしさ

忍戀

たれかよも思ひもかけじ言の葉も忍びならはぬ程はもらさじ

祈戀

ゆきめぐりむかふはまれのかげなれや頼めて空に祈る月日を

聞戀

ひたつらの見まくほしさに言問へば語るにつけて見劣はせじ

不逢戀

逢ふこと（こい）にかへぬ命のながらへてなほおなじ世に物思へとや

契戀

忘れじの契にかへてのちせ山うごきなかりきうさぞかひある

逢戀

にひ枕さら（こい）にうつつの紛れめや逢ふと見しよの夢もありしが

別戀

もろともにかこたばせめて慰めむきぬぎぬいそぐ鳥の八聲を

後朝戀

黒髪のおもかげさらぬ移香にまたねさへにぞ起きうかりける

遠戀

ゆきかよふ思につるる身ともがな重なる山もさらばいとほじ

近戀

朝夕(の)へだつる關となすはうしたただあし垣のひとへばかりに

馴戀

ちしほまで思ふ心を染めそへて馴るるや中のしぐれなるらむ

顯戀

浮名をばさりととも人のつつみけむ思ふあまりのわれや仇なる

増戀

かばかりはいつ摘みそへておもひ草ちから車のやる方もなし

偽戀

いつはりのあるをも嬉しさらでやはなげの情の露もかからむ

變戀

立ちかへるたのみは絶えてわが袖の波よりこゆる末の松やま

經年戀

年は今日昨日とくれてあすか川ひとつおもひの變る瀬もなし

忘戀

見ず知らぬ昔になしてわするるを驚かさむもさすがわりなき

片戀

ひけばひくためしは知らで梓弓こころづよさを何ならひけむ

恨戀

幾度のつらさをかつはかこちても憂身の咎にかへるうらみを

雑十首

浦松

浦風もこすゑにかけて夕波のしほひにとほきまつのむらだち

窓竹

とり出でて向はむふみはかたくともすなほにうつせ窓の吳竹

山家嵐

かくていつ住みはつまじきまつの戸にむすぶ枕は嵐のみして

髯旅

今日いくか日もかさなりて故郷は遠ざかるよりいと忘れぬ

述懐

和歌の浦や君がひかりに照さなむ玉にまじはる藻屑なりとも
あぢきなくよはひはたけぬ人の身に生れしのみを樂みにして

田家

年もへぬさはならはしの身なりけりあはれ田の面の獨くるるに

懐舊

まだ知らぬ行末とても思はずや思ひいですやこしかたのそら

神祇

なべて人ことわり知れなほかよりもわが國守る神のかしこさ

釋教

色よ香よなにかみのりにもれぬべきめづる心もさのみ厭はじ

祝言

つくま河底すむ石のかずかずに千代に八千代の岩ほをし見む

後水尾院御集拾遺

春風春水一時來新寶永十六年正月九日仙洞御會
新一人三臣和歌

神風やみもすそがはの水上になほたちかへる世世のはるはつきせぬ
あらたまる春のしらべにかよふらし泉のこゑも松のひびきも
こほり解く汀のなみにうちそへて梅が香よする池のはるかせ

風光日日新新同十七年正月十七日仙洞御會始
新一人三臣和歌

さくらにも今ぞうつさむ朝な朝な色そふ梅のはなのほるかせ

梅香何方同十八年正月二十八日仙洞御月次
新一人三臣和歌

玉すだれもり入る風の梅が香はおもふに怪しいづくなるらむ
咲くかたをさして教へよ海士小舟初瀬のさとにほふ梅が香

春情有鶯延寶五年正月十九日禁裏御會始

後水尾院御集拾遺

ちりもせじ花より先にうぐひすの聲の色香にそむるころは

河春月 正保四年三月二十三日禁中御當座
新一人三臣和歌

更けゆけばおとのみさえて川水のすめるともなき春の夜の月

見花 寛永十四年十一月二十四日禁裡御月次
新一人三臣和歌

春をへてみるまよひまで花の陰にたつ事やすき物とやは見む

藤 御撰歌千
首和歌

ゆく春も過ぎがてに見よ藤浪にいまたちこゆる花はあらしを

牡丹 新寛永十六年三月二十七日
新一人三臣和歌

咲く花のかずさへそひて紅のいろもことしはふかみぐさかな

春釋教 同十五年五月二十四日禁中御月次
新一人三臣和歌

照し見よ春日に消えぬ霜もあらし野邊の若菜のつみはありとも

卯花繞家 同十六年五月八日
新一人三臣和歌

月はなほめぐらぬかたに影すむやつづく垣根に咲ける卯の花

雪にまた降りこめられぬ卯のはなの垣根にあまる小野の山里

卯月郭公 御撰歌
類聚

はつごゑはまだしのび音の時鳥卯月はおのがときならずとも

野郭公 御撰歌千
首和歌

聞きそめて飽かぬ野中のほととぎす見おくる程ぞ空に久しき

故郷橘 百首
御詠

ふるさとの軒端に匂ふたちばなや昔しのぶのつゆをそふらむ

夏月 御撰歌
類聚

てりそはむ紅葉は知らず秋風も月のかつらは待たぬすすしさ

秋夕思 寛永十四年八月二日仙洞御當座
新一人三臣和歌

誰が秋か露のほかなる鳴く鹿もまがきの蟲もたへぬゆふべに

澤間秋夕 同十五年七月二十四日禁中御月次
新一人三臣和歌

ゆふぐれの秋はなみだも色になる野澤の水にながれそふまで

女郎花

正保二年八月十五日禁中御會
新一人三臣和歌

女郎花たれ露わけて花の色のみだにむせぶあはれ知るらむ

瀧

寛永十五年八月十五日仙洞御會
新一人三臣和歌

月ぞなほ影もとどめぬ吉野川はなはせかれしたきついねに

海

月同

蟹小舟みやこに告げよ和田の原八十島かけておもふつきかけ

浦

月百首
御詠

ゆく船にゆふべあかつき見るつきも波路やかはるあきの浦人

月前雲

寛永十七年九月十三夜仙洞御會
新一人三臣和歌

暮れぬ間は八重にかさなる雨雲も思ふこよひの月なへだてそ

月前菴

同

白妙の雲にまがへてきりぎりすいたくな侘びそすめる月かげ
きりぎりす長き夜あかですむ影も今やまがきの月に鳴くらむ

月のうたとて

類聚會

山風のたたくゆふべは聞きすてて音なき月にあくるしばの戸

右一首山家月の題にて武者小路の詠とて世にもてはやし侍れど御會

類聚のうちにまさしく御製とあり

木葉隨風

寛永十五年七月二十四日禁中御月次
新一人三臣和歌

秋風に又やまかするさだめなく時雨に染めしこころ木の葉も

逢

戀
正保五年閏正月八日禁中御當座
新一人三臣和歌

逢はざりしうき年月を今さらの夜をへだてむと思ふわりなさ

寄山戀

同二年十月五日禁中御會
新一人三臣和歌

跡もなく木の葉のうづむ山よりもわが迷ふ戀の道しるべせよ

寄月戀

同三年九月十三夜禁中御當座
新一人三臣和歌

ながめてもなぐさむかたぞなかりける戀ふる涙にくもる月影

寄草戀

新一人三臣和歌
寛永十四年八月二日

後水尾院御集拾遺

道たゆる宿の浅茅のあき風をまくすにかへすころとだに知れ
ほに出でてみだれむすゑの露はうしつひに尾花がもとの心も

寄露戀 寛永十四年八月二十三日仙洞御當座
新一人三臣和歌

今宵だによし思ひ知れ濡れてこし萩散る小野の露のかごとは

閑居 同年二月三十日仙洞御當座
新一人三臣和歌

山深くものにまぎれぬすみかにも住める心のしづかならずば

旅泊夢 同十五年四月二十四日葉中御月次
新一人三臣和歌

おもひやれ夜をへて馴るるから泊夢をば見^まする波のあはれを

寄月旅泊 首御撰千
和歌

漕ぎ出でて明日の波路もこととへばこよひの月はみつの泊を

庭松親王御方御會始

うつせなほ竹の園生のあととめて老いぬる松の庭のをしへを

嶺松 正保二年七月葉中御當座
新一人三臣和歌

嶺に生ふる種も知らじな八千代へむ御垣の松の春のひとしほ

白鷺立江 寛永十六年五月八日
新一人三臣和歌

さやけしな鷺もかもめも白波のよするみぎはにうつる日影は

庭草

はらへども後より生ふる庭草をおもへば野邊は繁らざりけり

夜述懷

なにごとをなげきの杜のしげからむ今いくほどの老の寐覺に

寄月述懷 首御撰千
和歌

世をなげく涙がちなるたもとは曇るばかりの月もかなしき

寄月祝言 同

いくめぐり幾代の秋の空の月くもりなき世のひかり見すらむ

寄月祝言 寛永十六年五月八日
新一人三臣和歌

月よみの神のめぐみや露ふかきこよひの秋のひかり添ふらむ

後水尾院御集拾遺

月はなほ神代のががみかけまくもかしこき影をいまでも残して

寄松祝

散りうせぬためしと聞けば古き世にかへるを松の言の葉の道

神社祝隱岐國へつかはさる

おきの海のあらしなみ風しづかにて都のみなみ宮つくるなり

神祇

たのむぞよみもすそ川のすゑの世の數にはわれもれぬ恵を

寄日神祇

八百よろづ神もさこそは守るらめ照る日の本の國つみやこを

寄花神祇寛永八年三月十四日詩歌御會

あかずとや神もうくらむ色も香もふかきこころの花の手向を

釋教

耳に聞き目に見ることのひとつだに法の外なる物やなからむ

寄舟無常御廣千首和歌

世の中の波のさわぎもいつまでの身の浮舟よいぞさもあらばあれ

拈花微笑

心もてひらくるはなは梅が香枝といふにはばや人によしいはずとも

一枝をささげてしめす花の色を知る人もなしよし知らずとも

物名微子宰我子夏孔子子路といふ文字を

山人はさびしさいかにかにしかなきておくしもしろし岡の邊の松

物名みやまつぐみといふことを

大和路を絶えず通ひしをりのみやまづくみてみむ井手の玉水

物名笙笛箏築琴琵琶

うしやうし花匂ふえに風かよひちりきて人のこととひはせず

寛永十九年十一月二十日あたらしき亭(女院庭)

上に被造(の)さまさまにしつらひたるにて月出

でてのち人のうたふを聞きて「いへづくりたぐひなし」といふことを折句によめる新一人三臣和歌

幾夜をへ月も見ナホイるべくりちの歌くりかへし歌ひ猶かげもタヒよし
また沓冠の御歌「このちややたぐひなし」といふ

ことを

ことさらの千代のはじめや大和歌くりかへし歌ひ猶仰ぐらし

右一首一本詞書御茶屋を建てし板倉周防守に御色紙被下候

寛永十六年一條殿一獻持參の時歌の御物語の

次に回文の御狂歌新一人三臣和歌

島のこそくはるれさかなみよしばし世皆かざれるはくそこのまし

延寶三年歳旦に

・この春にせめておどろく身ともがな恥おほしてふ命ながさを

同四年正月御試筆に

老の波たちゐくるしきこよろぎのいそがるるこそわが思ふ道

岩倉御幸のとき

のどけしな風もうごかぬいはくらの山も花咲く春のこころは

御室の御幸のとき鹽竈といふさくらを御覽じ

て

浦の名に聞くは遙けきみちのくの花は軒端にちかのしほがま

烏丸資慶「春になほいまひとたびを松が枝のふ

ぢなみかけてさそへ花園」とよみてたてまつり

ける御かへし

藤波のなみに思はばかひもあらし月にさそはむ秋のはなぞの

またおなじ人の「もみぢ葉や染めて待つらむ花

園の秋にといひし月のかつらも」とよみてたて

まつりける御かへし

うそといふ鳥やとまらむわすれ草おふる花ぞの秋やくれなむ
茸狩御幸のとき叡山を叡覽ありて

見よや見よ都のふじのそら晴れて月もうへなき秋のひかりを

烏丸大納言光廣卿紅葉一枝を折りて「一枝はわ

きてぞ手折るうす紅葉君がことばの色をそへ

よと」といひつかはしける御かへし近衛大將信

尋公にかはりて

一枝はわきてぞ見ゆるうす紅葉きみが言葉のいろそへしより

中院通村おほやけの御心に不叶事ありて下向

の刻ひさしく武城にとどめられて寛永寺にう

ちこもりて年経し秋のころ道房卿のかたより

「さそひ得ぬくさのまくらを月もさぞ出でてや

うらむ武藏野のはら」とありける御かへし仙洞

より、後十輪院内
大臣詠草

おもひあればなぐさめかねつ武藏野に姨捨山の月やすむらむ

相國寺松鷗軒にくだされし御歌

いしにかへる松のかもめは聲さえていはるの海にのこる潮風

龍の繪の讀に

手にもてる扇の風は吹かずとも繪にかくたつよ雨降らすらむ

寛永二十年十二月九日雪の降りけるに禁中よ

り仙洞へまゐらせられける御短冊に「霜の後み

かきの竹の雪見ればまだこぬ春の花かとぞ見

る」とありければ院よりも御かへし竹の枝につ

けられて新一人三
臣和歌

今よりは雪もてはやす言の葉もみかきの竹のよよにつもらむ

寛文四甲辰秋辰巳の方に彗星あらはれけるに

後水尾院御集拾遺

松の葉のちりうせぬ世のためしには空にたつみのははき星哉

女御入内の御時將軍家よりの使藤堂和泉守高

虎に橘の折枝につけてくださる

名にしおはば花たちばなはそれながら昔ばかりの匂やはある

藤堂大學頭所持の末の松山といふ石を匂感あ

りて御色紙をくださる

あふことはわが松山のあだにのみ幾年なみの越えむとすらむ

或人の歌に「いろごろも心のほかにきしものを

憂世の袖と人やいふらむ」とよみ侍るをきかせ

たまひて匂感のあまりに

よしやただありしながらも世の中を思ひ離れむ程ぞ知らるる

御位ゆづらせたまへるとき

思ふ事なきだに背く世の中にあはれ捨ててもをしからぬ身を

寛文十二年十二月女院御所の庭に高さ三丈ば

かりに雪にて富士山のかたをつくらせ松植ゑ

させなどして御覽す法皇御幸なりてよませた

まひける

花鳥の色音もなにか老が身はゆきよりほかのともならばこそ

延寶三年十一月二十四日十四日イ法皇八十の御賀に禁

中よりしろがねの杖につけさせたまひて君が

手に今日とる竹の千代の坂こえてうれしきゆ

くすゑも見むといふ御歌をたてまつりけるに

御かへし

つくからに千年の坂も踏みわけて君が越ゆべき道しるべせむ

御八十五歳の夏御筆とらせ給ふ御ついでに近

習伺候の輩に題をこはれしに待郭公といふこ

とを此宸筆禁中へまゐらせらる

高砂の尾上ならでもほととぎす待つはいくよの物とかは知る

加茂靈源寺の御影に應化非心佛のころをあ

そばしつかはさる

おもへただ應化の外もなすことのあらばまことの佛ならじを

延寶のころ新殿に御移徙ありけるをり池岸有

松鶴といふころを

池水の岸根の松に千代ふべきところを得てや田鶴も住むらむ

承應元年大樹より鶴をたてまつりけるをり

鶴かめも知らじな君がよろづ代の霜のしらぎく残る日かすは

延寶五年七月五日新廣義門院國子かくれさせ

給ひしのち今上におくらせ給へる御歌

六字の名號を初句のかしらにすゑて瓦礫をつ

らねかのなきかげにたむけて懷を述ぶるといふことしかり

なにごとも夢の外なる世はなしと思ひし事もかきまざれつつ

むかひゐて唯さながらの面影もひと言をだにかはさぬぞうき

あけ暮にありしなからの事わざも目の前さらず見る心地して

みぬ世まで思ひ残さずとばかりのこの一ことを何にかへまし

たれも思へ聞きても見ても驚かぬ世をいつまでの空頼みして

ふたたびはうまれ逢はむも頼まれぬこの世の夢の契かなしき

東福門院崩御の御時に

かかる時ぬれぬ袖やありそ海のはまの眞砂のあめのした人

後光明院崩御の御ときに壬生院へつかはされ

し承應三年九月

をりをりに思ひいづれば草も木も見るに涙のたねならぬかは

後水尾院御集拾遺

大樹家綱公薨去のとき延寶八庚申年五月八日

あはれなり鳥部野のやまのに立つゆふ煙われもたきざの身をわすれつさへ風におくれさきだつ
世一本のあはれ知るかとぞ思ふ時鳥おのがさつきの空に鳴く音は

御病中に

老のやまかりする人もなきものをおちくるししの哀なるかな

御辭世

ゆきゆきて思へばふもかなし末とほくみえしたか根も花の葉のしら雲

題不知

人よしれいへどばいさらなるわが思こころ餘りてことば足らずと
しなばやなもよほし草よ世の中の目にも耳にもあまる事こそ
いかにせむいへばまことの道ならぬ道の願もたちがたき世にを

右二首一本題述懐 又一本此御歌は延寶巳年世中あやしき事の多く
侍りけるに

曲木にやなぎのいとをよりかけてすぐなる道を風にとはばや
草原やしげらばしげれおそぎナサキのがままとても道ある世にとは思はず

右一首一本澤庵和尚を東堂に被勅口時東武より申返す故に本院へ御
讓の時云

賢きは捨てられぬ身ををすつる世に世に捨てられてすてぬ身ぞうき
年月をよそにのみ見て過ぎしかどきのふの木こそ身の類なれ
思ふ事なきだに背く世の中にあはれ捨てても惜しからぬかは
うしとともうからずともよしやただ五十の後の幾程の世は
いとふべきことわりまでは知る人のすつるに難き世の習かな
世の中はあしまの蟹のあしまどひ横にゆくこそ道のみちなれ
みな人は上のに目がつく横にゆく蘆間のかにのあはれ世のななる世や
古あはをかきおく筆のあともうしさらすばくだる世とも知らじを
ひらけなほ文の道こそいにしへに歸らむあとは今ものこさめ

右二首一本題寄書述懷 又一本此御歌初はのこらめと被遊有詔諸公

卿御てにかはを思召處有之歟と諸公卿不得心烏丸資慶如此奉存候旨

被申上有御褒美則御懷紙被遊被下也

あかざりし昔の^{ねよりい}ことをかきつくる^イ硯のみづはなみだなりけり
生ひそむる年よりしるき^イ笛竹の末の世ながくならむものとは

右一首笛吹藤田清久拜領

あぢきなや心のうちのしるべにて尋ねかねたる鴉のくさぐさ
いたづらになすなよ心なほき木に曲れる枝はありとゆるして

右一首一本題寄木述懷

人もこれ草葉もしげし野もひろし摘む菜となれば雨も少なし
更けわたる月に誘ひてすみのぼる河音たかき夜半の^{レイ}のどけさ

右一首毘沙門堂前大僧正公海拜領色紙

かげやとす淺茅が露のみだれきて野風にくもる月もこそあれ

むかし見し野原は里となり^{民のほどい}にけり數そふ^イ人のかすは知らねど

右一首一本調書に修學院へ御幸のときむかし御覽せられたる野原の
人里となりて侍りければ

千代の色ものどけき空にあらはれて春の野しるき神無月かな
なつふかみしげる野もせの露に見よ麻もよもぎもれぬ惠を
天が下隠るる事のなからめやきてしかりぎぬひるよしもがな

右一首一本題述懷

思ふぞよわれもむかしは九重のしのばれぬべき道もこれまで

右一首一本題御目覺に

うつすともえやおよばぬ嶺の松しろきをのちの面影にせよ
いとふとして皆人ごとに身を捨てば山やなかなか憂世ならまし^{あはれ}
あさがほのもろきも千代の白菊もおなじ枯野の霜のあはれさ

右一首一本題資慶卿をいたませ給ひて

うき草のすゑより水の春風や世に吹きそめてのどけかるらむ
さやけしなかひこを出づる鳥の音に山しもわかずあくる光は
百敷やなれしわが世もおもふにはいくほどならぬ松の木高さ
いつはりのことのみおほき玉章をひきかへしても恨みつる哉

一本に後陽成院崩御いたみの御歌八首の次に又として載せたる題不知御製十四首

夕暮はいとどさびしきいろそへて風にみだる庭のみち葉
明日はまた木かげにぞ見むしばしなほこの夕風に残る紅葉も
月もなほ空にやすらふ楨の戸の明けぬといひし影はとまらず
もみぢ葉をさそひつくして吹く音は木木にさびしき夕嵐かな
いかにせむつれなきよりも中中に逢ひ見てのちの今朝の面影
ゆふあらし高根のみぢさそひきて錦をしける深山邊のさと
かきくれぬわかれし今朝の面影の立ちはなれぬも落つる涙に

散りしきし庭のみぢ葉吹きたてて錦と見する夕あらしかな
逢はぬまの歎はものか別れこし今朝のつらさに思ひくらべて
吹きつくす木の葉が上は音もなしゆふべの風も松にのこして
わりなしやあはぬ恨の涙にもくらべぐるしき今朝のたもとほ
秋の色のかたみにのこすもみぢ葉をつれなくさそふ夕嵐かな
みちしばの露の玉のを消えねただ今朝のわかれに何残るらむ
散りし^くをまた吹きたてて夕風の紅葉を庭にのこさぬもうし

五典の御製

君臣有義

天つ空くもりなきまで照る月のうつれる水のそこいさもにららす

父子有親

雲居より澤邊にかよふ聲すなり子をおもふ鶴も思はるるかな

夫婦有別

ゆきわかかれ山田もる男ぞいとまなき賤機帯のとけし夜の間も

長幼有序

春ごとに梅よりつぎて咲く花のこずゑ數多のをりふしぞなき（上イ）

朋友有信

蘆間より友したふこゑぞ哀なるおのれのみやはあさる雁がね

八景の御製

粟津晴嵐

雲はらふあらしにつれて百舟も千舟もなみのあはづにぞよる

勢多夕照

露しぐれもる山とほく過ぎきつつ夕日のわたる勢多のなが橋

矢橋歸帆

真帆ひきて矢橋にかへる舟はいま打出のはまのあとのおひ風

三井晚鐘

思ふそのあかつき近きはじめぞとまづ聞く三井の入相のかね

唐崎夜雨

夜の雨におとをゆづりて春風をよそになたてそからさきの松

比良暮雪

雪晴るる比良の高嶺のゆふぐれに花のさかりを過ぐる春かせ

石山秋月

石山やにほのうみ照る月かげは明石も須磨もほかならぬかな

堅田落雁

嶺あまた越えて越路にまづ近き堅田になびき落つるかりがね

名香にあそばされける御製七首

蟬の羽衣といふ香に

蟬の羽の夜のころもは薄けれどうつり香よりも匂ひぬるかな

花の色といふ香に

千代をへて底まで澄める池水にふかくもうつる花のいろかな

小夜衣といふ香に

小夜衣こは世にしるきにはひかな菖蒲をむすぶ草のまくらを

五月雨のそらといふ香に

かりそめに軒のあやめも時しあれば五月雨の空に匂ことなる

春の山風といふ香に

たづねつる花のあたりになりにつけり匂ふにしるし春のやま風

心こころといふ香に

吉野山やまより深きものやあると心にとへばこころなりけり

花薄といふ香に

花すすきはほのかに聞けば秋霧のたち野のすゑに牡鹿鳴くなり

十一時の御製

ねても又さめてもつらき世の中にあるかひもなきわが住居哉
うしといひ世に住みながら露の身の消えてはかなき名をや流さむ
とらば手にたまりもやらぬ秋の夜の草葉の露にやどるつき影
うきときの心はやがてそのままに世を厭はばや思ひかへさむ
たつままに霞のころもき重ねて花のひもをばいつか解くべし
みなかみや吉野の山もつづくらむ花のいかだをながすはる風
うまれきて世をすみぞめの袖ならば心を染めよ法のしるしに
ひつしよの浪に任せてゆく舟ふねのよるべも知らぬ心地こそすれ
さるからに心ぼそくも聞ゆるは山よりおくのいりあひのかね
とりのねを夢うちさめて聞くときはその曉はものうかるらむ

いぬ・櫻また咲きそめしやま櫻こすゑにあふはきさらぎのはな
いつまでか老に心のわかからむ去年をことしと思ふ身にして

後光明天皇御製

立 春

うち出づる波と共にや立つ春のひかりにあたる谷のこほりに

早 春 正保四年
新題林和歌集

はるたちて幾日もあらぬ梅壺の梅こそにはへこすのあさかせ

初 春

いつしがと岩間のこほりうちとけて浪のあやおる池の春かせ

初春霞 正保四年
近代御會和歌集

逢坂や關のこなたに春きぬとかすみそめたるあさ日かげかな

早春霞 慶安三年
近代御會和歌集

白雪はまだふるとしのいろながら遠きやかすみ春のやまの端

後光明天皇御製

早春水

こほりゐし細谷川もうち出づるなみのはなにや春を知るらむ

初春祝道 慶安四年正月十九日御會始
公宴御會拔書

祝ふぞよこのあら玉の春年イと共に道もかしこき世御代イ世にかへれと

每山有春 正保三年正月十九日御會始
新題林和歌集

しろたへの花はいつ見む春はまづ山また山のかすみそめぬる

春風解氷 同四年正月十九日御會始
新題林和歌集

風もなほのどかなる代は氷りゐし池のこころも春にとくらむ

曉霞 同二年御會和歌集

冴えかへるかせも知られて山の端はかすみもやらぬ有明の月

朝霞 慶安二年御會和歌集

山の端のかざりはそこと見えわかで霞を出づる朝日かげかな

題しらす 泉涌寺來迎院藏
宸翰懷紙

かすみたつ末の松山ほのぼのと波にはなるるよこぐものそら

朝霞

朝まだきかすみの衣たちあへぬそでにもあまる春のいろかな

松間霞

立ちならぶ梅の匂やさそふらむ松にも來鳴くうぐひすのこゑ

霞添春色 承應元年正月十九日御會始
近代御會和歌集

朝づく日よにも曇らぬ世は春のひかりにほふ薄がすみかな

若菜知時 寶永二十一年正月十九日御會始
公宴御會拔書

しろたへに猶ふる雪をうちはらひ春しりをむる若菜をぞ摘む

鶯知春 同二十一年新題林和歌集

宮のうちに聞くものどけし春きぬといふばかりなる鶯のこゑ

鶯知萬春 承應二年正月十九日御會始
近代御會和歌集

うぐひすのももよろこびの百敷にあひにあひたる萬代のはる

後光明天皇御製

鶯告春

鶯のたれあらそひておくれじとおのがときしる花をしるらむ

梅近聞鶯正保二年正月二十八日御會始
公宴御會披露

軒ちかき梅をこころに朝な朝な花にそひゆくうぐひすのこゑ

逐年梅盛慶安二年正月十九日御會始
近代御會和歌集

あかずおもふ心をそめて春ごとに咲きまさりゆく宿の梅が枝

梅薫風

香にめでて袖にやうつる梅の花さくや軒端のはるのゆふかせ

梅薫枕

よしや今日ちらぬばかりに手枕に夢路もにほふ梅のしたかせ

柳臨池水慶安三年正月十九日御會始
近代御會和歌集

池水のそこなる影もいろそへて年の緒ながきあをやぎのいと

待花同三年御會和歌集

待ちわぶるこころの色やまだ咲かぬ梢ににほふ花のおもかけ

尋花

思ひしる花やなからむあくがれて知らぬ山路に迷ふこころを

交花

さもあらばあれよし散るまでは交りなむ花になるは厭ふ習も

瀧花

あかず見む花の木の間の瀧の絲の長長し日を繰りかへしても

慶安辛卯朝親行幸御會に花契多春集顯

契りおかむ藐姑射の山の花にあかぬ心に千千の春をまかせて

欸冬露

咲きしよりただ露の間に山吹の見らくすくなく暮るる春かな

首夏

春はただかすみで見えし遠近のやまもみどりの色やそふらむ

廬 橘

立ちよれば風も吹きあへぬ袖にさへあまるばかりにほふ橘

夏 草

涼しさやわけ行くかたに吹く風もなびく生野のつゆのなつ草

杜 夏 草

夏きてはあとよりしげる大あらしの杜の下草かりもつくさじ

山 新 樹

慶安三年
近代御會和歌集

若みどり木かげすすしき夏山にたづねむ花もわすられにけり

瀧 月

正保四年
近代御會和歌集

ぬきみだる玉かとぞ見る月かげもきよく涼しき瀧のしらなみ

水 螢

正保二年
近代御會和歌集

池水になほきえやらで飛ぶ螢はかなく燃ゆるおのがおもひを

晩 夏 蟬 聲

しぐれせむこすゑの秋もいそぐかと夏は空蟬なきくらしつつ
からごろもかたへ涼しく鳴く蟬やこぬ秋ほそくもりの下かせ

星 月 涼 如 水

秋の水みなぞこすみて天の河ほしのあふ瀬はいかにすすしき

萩 如 錦

紅葉せむ深山の秋にさきだてて眞萩や野邊のにしきおるらむ

待 月

正保三年
近代御會和歌集

やまの端の雲より雲にうつりきてなほ出でやらぬ秋の夜の月

秋 興

風吟

たちぬれて身にしむからに我が袖も秋のけしきの森のした露
夜やくらき雲路や遠き行きやらでいまだ旅なる雁のひとこゑ
雲の色も風のひびきもおのづから人のこころの秋よりぞ知る

山 月

後光明天皇御製

こよひだに入方見せぬかげもがなおほうち山のいざよひの月

浦月

うらとほく眞砂をひたす夕潮にやがていざよふ月も満ちぬる

題しらす底深録置

まきのやに聞きし時雨は染めやらで夕日色こき峯のもみち葉

落葉嵐

あさなあさな木の葉も 秋はおいその森のこがらし

題しらす

下紅葉かすちるやまの夕しぐれ濡れてやひとり鹿の鳴くらむ

山時雨

峯のくもや時雨をさそふ麓まで木の葉にくもる山おろしの風

寛永二十年十二月九日雪のふりけるに仙洞へ

まゐらせられける御短冊新一人三臣和歌

霜の後まがきのたけの雪みればまだこぬはるの花かとぞ見る

冬祝言承應元年近代御會和歌集

千代の色ものどけき空にあらはれて春の名しるき神無月かな

祈逢戀新題林和歌集

いまぞ知るうき年月にあふことをかひてたのみし頼む神のしるしは

顯後悔戀同

いひさわぐ人の浮名に逢ひ見しもなかなかつらき契なれとや

戀舟

なみだ川ひとのこころの波風によるべ知られぬ小舟かなしも

寄風戀

秋風のうしや音して楨の戸をささで待つ夜のこころさわがす

寄草戀新題林和歌集

初草のはつかに見しをちぎりにて靡かむ末を待つもはかなし

後光明天皇御製

鶴馴 砌 正保五年正月十九日御會始
公宴御會按書

住みなれてなれも千年の友よぶや雲居の庭のつるのもろごゑ

砌 松契 齡 承應三年正月十九日御會始
公宴御會按書

よろづ代と猶こそ契れ袖ふるるしばのみぎりの松の千とせを

松契年

幾千年ちぎりかおきし神垣やひさしき世世のまつのみどりは

松添 榮色 寛永二十年十一月九日御代始
公宴御會按書

霜の後の松にもしるしさかゆべき我が國民の千代のためしは

後西院水日集

春部

初春祝 明暦元年正月十九日御會始

九重の春もあらたまの春きぬと松は千代にや千代のひとしほ

山 霞 同年二月二十二日

佐保姫のかすみの衣はるきぬと袖ふるやまに立ちかさぬらむ

立 春 同年同月二十四日

朝日影いづるそなたの高根より來る春しるくかすみそめぬる

花漸開 同年同月二十五日

日にそへて花咲きぬらし吉野山みなしろたへに松もなりゆく

雲 雀 明暦元年三月二十四日

夕がすみあがる雲雀のこゑは^{のこゑ}して翅は見えぬ野邊のをちこち

夕 雉 同年六月二十五日

夕ぐれはなれもたへずや妻戀のこゑもしきりに雉子なくなり

早春氷^水 同年同月二十四日

年なみのよどむ瀬もなくうちとけぬ氷ながら^{ささ}に春や立つらむ

初春雪 同年七月二十一日

春きぬと今朝は都の富士の根のおもかげなれや雪のむらぎえ

早 春 同年二月二十一日

きのふ今日氷ながれてみなせ川みづにも春やありて行くらむ

隣家花 同年同月二十四日

吹くからに散りぬともよしあしがきの間ぢかく匂ふ花の春風

江上霞 同年同月二十五日

こぎ出づる入江をとほみ楫の音もかすむ難波の沖のともぶね

海邊霞 同年六月十四日

和歌の浦にちぎるゆくへはひさかたの雲井に遠くかすむ海面

里歎冬 同年九月二十四日

あかず見む咲く山吹のかげ見えて^{いはぬ色こそ}いはいはぬ色にゐでの玉川

花のあるじや 同年十一月二十四日

盛なる花のあるじやとふ人のほかにはなにを待たむとすらむ

霞中瀧 同三年二月二十二日

この山の上^のにありてふ瀧なれやかすみのうちにひらく岩なみ

元日宴 同

百敷やものつかさに御酒たまふ使は世世のはるに知られて

寄雲花

にほひこそ四方にみだるれ風吹けとところもさらぬ花の白雲

花下送日 明暦三年二月二十四日

今日いく日あかぬ心にかへるさも知らぬ山路の花にくらして

窓前梅 同年三月二十七日

あかすなほ閉ぢもやられず月移る影さへにほふまどの梅が枝

霞 同年四月二十四日

もみち葉に見し面影ぞ立田山くれなるにほふはるのかすみも

夕 鶯 同年五月二十七日

聞きあかでやどりやからむ夕暮の真垣は山とうぐひすの啼く

關早春 同年六月二十五日

東路にありてふせきの名にたちて霞や今日のはるを見すらむ

早春雪 同年同月二十二日

山の端も去年のゆきげの色かへて曇るやかすみ春をわくらむ

柳先花緑 萬治元年正月十九日御會始

立ちならぶ花は木の芽もはるの色にまづ染めけりな青柳の絲

春 月 同年九月二十五日

いつはあれど霞める花の木の間より光もにほふはるの夜の月

翫 花 同年十一月二十四日

春ごとにそめし心の色に出でて花やちしほのさかりなるらむ

霞遠山衣 同二年正月十九日御會始

しろたへの雪はのこらで高山や春はかすみのころもほすらむ

湖上霞 同年同月二十六日

鹽焼かぬ志賀の辛崎ほのぼのと靡くけぶりやかすみなるらむ

鶯知春 同年二月二十二日

都さへまだ白雪のふる巢にはいかにほる知るうぐひすのこゑ

名所花 同年同月二十五日

しらくもに松も檜原もこもり江のはつせの山ぞ花にあけゆく

梅毎年香 萬治三年正月十九日御會始

としごとに色香をそへて咲く梅の花にや千代の春も待ち見む

早春山 同年二月二十二日

三輪のやま春のしるしは杉ならぬ檜原がすゑにまづ霞みゆく

春 月 同年同月二十五日

かすめなほ梅の木の間にもる影は月のにほひも深き夜のそら

餘寒風 同年六月二十八日

立ちあへぬ霞のころも春をあさみ去年見しゆきをかへす山風

早春朝 寛文元年六月二十五日

かすむともまだ白雪の山の端に春のいろなるあさづく日かな

立 春 同二年正月二十四日

氣色だつ霞ばかりに今朝の朝け今日はこのめも春を見すらむ

夜 梅 同年同月二十七日

梅が香のもりいる風に閨の戸のあけて見るべき色ぞ待たるる

浦春 月 同年同月十五日

大空におほふかすみの袖の浦は月やみるめのさぞなすくなき

松 藤 同年同月十七日

藤なみをこすゑにかけて影うつす松もありしにまさる池みづ

朝 霞 同年同月二十二日

咲き出でむ山の櫻のおもかげに立つやかすみも今朝ぞ匂へる

瀧下 醜 醜 同二年二月二十四日

こころせよなかに生ふてふ瀧浪もかかるいもせの山吹のはな

躑 躑 同年同月二十八日

なにに染めて松の下てる岩つつじ時雨も知らぬ色に出づらむ

江 花 同年三月十六日

さかりなる花に家路を住の江のきしなる草の名にやくらさむ

見 花寛文二年三月二十四日

斧の柄もかくてや朽ちし見るが中にあかず幾日を花に暮しつ

春 朝同年同月二十七日

春ふかくかすみぞ匂ふあさぼらけ残りすくなき花のこずゑに

森 霞同年六月二十五日

はなにまたいつ染めぬらむ佐保姫の立つや霞のころもでの森

梅花告春 同三年正月十九日

九重にこのかへりは春きぬとわれに告げしをおもふ梅が香

花添山氣色 同年同月三十日

千代經べきこは名に負ふ山路とて猶斧の柄を花にくたさむ

松迎春新 同四年正月十八日

雪のうちに見しに色そふ聲立ててよろづ代よばふ春のまつ風

夕 鶯同年六月朔

春の色をいと添へてや山本の霞むゆふべにうぐひすの鳴く

立 春同

住吉やあふぐめぐみの春立ちて咲き出でむ花をまつの言の葉

浦 霞同

おもふぞよ霞もはれて玉津嶋ひかりにあたる和歌のうらびと

春立つけふの 同年六月二十五日

一夜あけて春立つ今日の神垣に名におふ松もかすみあひつつ

華夷皆樂春 同五年正月二十三日

へだてじな人の恵は春とともによにみちのくも花のみやこも

海邊霞 同年同月二十二日

見るままに霞のうちもわかれ行く雲と浪とのうらのあけぼの

田 蛙同

小山田の蛙のこゑも聞く人のやがてことばのたねならぬかは

花誰家 寛文五年正月三十日

花の色もよそに眞柴を引きかこふ垣ほ清げに住むや誰れなる

初春待花同

今朝はまだ咲くころ遠く散る雪に春待ちえても花ぞ待たるる

關路花同

花はここにありと知らすな吹く風も關の名たたる霞へだてて

霞隔行舟 同年九月二十二日

漕ぐふねのほどなくそれかあらぬかと立つや霞にまがふ海面

閑中春曙 同年十二月十二日

山深きかすみの奥やしづけさも世のつねならぬ春のあけぼの

風來楊柳邊 同六年正月二十一日

吹きそめぬ柳にしるき時つかせなびくを春のはつしほにして

幽棲春月 同年同月二十四日

とめくればあはれ葎のやどの月おもひのほかの梅のにほひを

嶺樹霞

やまどりの尾上へだてて八重がすみ楨も檜原もふかき色かな

瀧邊花 寛文六年三月十四日

瀧津浪 すすむにかかる白玉のひかりも花のいろをそへつつ

雨後花同

よるの雨やかなしむ露のいろそへて今朝しもふかき花の父母かてい

春 曉 同年十一月二十三日

かばざくらにほふ霞に洩れ出でて春風くらきあけぼのもなし

春生人意中 同七年正月二十五日

のどかなる人のこころの春の色や世にはつ花とまづ匂ふらむ

門柳漸綠 同年同月二十三日

誰れとへと風もみどりにうち靡きやなぎの門のあけぼのの色

早春山 寛文七年正月二十三日

雪にこそこのすの間近くみし山も春はかすみの立ちへだてつつ

浦春曙 同

おもかげも何にくらべむ難波渦このうら浪のかすむあけぼの

籬歎冬

さかりなる八重山吹にかこはれて賤のまがきも面がはりする

見花述懐 寛文七年三月二十一日

世をばみな忘れて向ふ花ながら深きおもひの添ふもわりなき

春日望山 同八年正月二十二日

花咲かばしら雲かかる山も見む春やちりひぢ日かずつもりて

栽梅待鶯 同九年正月二十六日

さかば先ここにをき鳴け鶯のねこじて植ゑし梅にやはあらぬ

翫朝花 同年同月二十三日

あけぼのをながめつくして山の端の花に色そふ朝がすみかな

初春霞 同

春日野や草のはつかにたちそめて霞のころもうらわかきはる

澗落梅 同

ながれ出でて散りし後こそ人は知れ花さく梅も谷のうもれぎ

水邊躑躅 同年三月二十二日

浪のいろもめづらしげなき岸陰になほいひしらぬ白躑躅かな

歸雁成字 同

うす墨に誰が書きすてし水莖のあととはかもなく歸るかりがね

早春山

今朝のあさけ東路とほく來る春にまづ逢坂のやまぞかすめる

春 曉

なごりあれや花さへ匂ふ有明の月をのこしてかへるかりがね

水日集

風來楊柳邊

四方の國みなうちなびくはる來ぬと柳が枝のかせも見すらむ

花爲佳會媒 寛文十年正月二十三日

千代もあかじ花にまかせて契りおかむ歌誦しかはし情くむ友

春 風 同年三月二十三日

春は今日立枝の梅に吹きそめてにはふ幾木のはなのはつかせ

風光處處生 同十二年正月二十三日

雪も消えこほりも解けて岡谷にかがやく春のひかりのどけき

海上霞 同年同月二十四日

浦人のほすてふ網のめもはるに千里をかけてかすむなみかな

歸雁稀 同

春雨にひとりしをれてかへる雁とももなしとや空にわぶらむ

寄立春祝 同年五月七日

世をいはふ心かはらで唐の歌もかくや春立つ今日のことぶき

早 春 萬治二年六月六日

あさづく日のどかに向ふ山の端や春くるかたとまづ霞むらむ

雪中梅 同

しろたへの木ごとの花に洩れ出でて雪にかくれぬ風の梅が香

霞隔遠樹 同

おしなべて霞みわたれる春の色に四方の梢ぞそこはかとなき

梅香留袖 同

これもなほ人やとがめむ行きずりの袖さへあかす匂ふ梅が香

春 曙 同

えならずよ花のかすみに山かづらかけて匂へる春のあけぼの

柳 同年十一月晦

雪に見し垣根の柳いつしかになびくみどりのはるかせぞ吹く

水日集

竹 鶯萬治三年四月

窓ちかくわが友となるくれ竹に色そへて鳴くうぐひすのこゑ

山 花同

あかすのみわけ入る花にかへるさもいさしら雲の春の山ぶみ

松 藤同

ときわかぬ松のこすゑも暮れてゆく春知りがほにかかる藤浪

花如雪同

よしや見むさてもこすゑに嵐吹く花はいつまで雪とにほはば

梅 風同年五月十日

さそひ来てこてふに似たり散りぬともよしや梢は風の梅が香

夜歸雁 寛文元年六月二十五日

なれもおもへ花もかすみて有明のつきせすをしき雁の名残を

山家梅花 同年八月二十五日

山ふかみ誰れにか見せむ色も香もあたら垣根の梅のさかりを

暮山霞 同年十一月五日

暮れゆくや霞に匂ふゆふづく日かげをひがしの山にのこして

海邊霞 同二年二月七日

淡路嶋かかるかすみぞたぐひなき花や紅葉もなみのあけぼの

山残雪同

残りけり山には春もしらゆきのうすきかすみに色もくもらで

浦春月同

八重霞はらはば月もすみよしの浦の名に見むまつのはるかせ

見花戀友 同年七月七日

ひとり見る花にぞおもふ色も香も年にまれなる人にこそそへ

惜春不駐同

ゆく春のすがたになして風の花雲路のとりのかへり見もせず

柳 露 萬治三年四月二十八日

つらぬくと見し白玉もつゆの間にみだるるかせの青柳のいと

曙落花 寛文元年八月二十五日

これもまたうききぬぎぬの梢より花もわかれの春のあけぼの

後會契花時 同十二年正月二十三日

佐久良開折輪珠類那登契里越可舞宇梅乎香散湍流今日能東門人

欸冬露

あけぼのの櫻には似ぬ山吹も見るにゑましきつゆのゆふばえ

花誰家

知る知らぬ何か花こそとばかりに行き過ぎがての宿をとばばや

山霞

花紅葉こころにこめてからにしき龍田の山はかすみそむらむ

遅櫻

青葉のみ數そふ山のおそざくら花はしげみのなかにかくれて

綠竹辨春

太山木のみどりもあれど吳竹の千代の春知るいろぞことなる

立春

花鳥もいまぞ待ち見む今日をこそ春の出で立つ足もとにせめ

竹鶯

ひとよふたよ時のたけのふし馴れぬ音やうちとけぬ鶯のなく

野若菜

さぞな摘む芹も若菜も雪消ゆる野澤のみづのころごころに

春雪

はるもまだ淺澤水のあさごほり薄からでこそつもるうすゆき

行路梅

心ある誰が植ゑおきて道のべの行きかふそでにとまる梅が香

梅風

まきあげて見よとやはるの玉簾ひまもとめついできてにほふ梅が香

柳露

こぼたしとしと見るも亂るるおもひかな柳の絲のつゆのあさかせ

春雨

降るほどは降るともわかで昨日今日こすゑ色添ふ木やまののめ春雨

歸雁幽

名残あれや山の端高くよこ雲につれてわかるる雁のひとつら

春月

それなほもまた春のものとして眺むれば明くるも惜しく霞む月かけ

寄雲花

白妙のおもかけ匂ふ峯のくもにいつしか花をまがへても見む

霞隔花

さくら花つつむ霞のころもでにほころぶるまでにほふ春かせ

雨中花

今朝よりも花や咲きそふ白妙になびくこすゑの雨おもげなる

風前花

吹く風をいとへば花にあやにくの世のことわりも今更ぞうき

花如雪

わびつつは惜までも見むよしせめて消えずもあらなむ花の白雪

苗代

水かげも青みわたれる苗代にところえがほのかはづ鳴くなり

岸歎冬

やまぶきの花のさかりは玉川のきしにこがねの露もこぼれて

春藤

むらさきの花ぶさながらうらはまで映ある松にかかる藤なみ

三月盡

ともにゆく道ならなくに花鳥をさそひがほにもくるる春かな

青柳風静 延寶二年正月二十七日御會始

春かせになびく姿や見れどあかぬ柳のいとのがながし日も

青柳風静

鶯のねもごろあかす春かせのゆるすやなぎに來つつ馴れつつ
いと絶えずなびく柳のねもごろに見れどもあかぬかせの姿よ
おく露もかざしのたまとかがやきて風に柳のかみもみだれず
吹かぬまも風をすがたになびくなりしだり柳の枝もとををに

岡 花 延寶二年三月二日

立ちならぶ松の色さへ色そへてをかべの花ははなもひとしほ
咲く花にまじる岡邊の松の葉はいつとなきしも色をそへつつ

柳絲隨風 同六年正月二十二日御會始

なびくなり風の緑も世の春にやなぎのいとどいろを添へつつ

柳絲隨風

うきぐさに末葉まじへて川岸にいとくりかへす風のをやぎ

處處立春

へだてじな玉のうてなも數ならぬ垣根つねねも春のひろきめぐみは

雪中鶯聲

白雪のしらぬ春をあさまだきまだきに告ぐるうぐひすの聲

梅薰風

吹き迷ひることも知らぬ木の本をとめすは惜しき風の梅が香

静見花

いとふべき風のうさまで忘れつ花の色香にそむるこころは

梅 鶯

千代も猶ちらでさかりの花なれば梅の立枝もさらぬうぐひす

連峰霞

春を浅みかすみのうちに薄くこく重ねて見するをちこちの山

餘寒月

冴えかへる夜半の嵐に梅が香もおぼろげならぬ窓のつきかげ

山家花

とへかしなとはれじとこそ隠家のやまの櫻もさかりばかりは

暮春鶯

聲のうちに春を（句）残して鳴けや鳴け花より後のやどのうぐひす

春地儀

とけゆけば水こそまされ峯のゆき汀のこほりひとつながれに

春居所

あばらなる野中の庵のわびしさも花うぐひすの春やわすれむ

春動物

日影さすこすの間近くさへづりてあかずともなふ百千鳥かな

春人事

くればくれね花こそあるじ櫻がり知らぬやま路にかり枕せむ

春雑物

ながき日もまなばでくらすほど見えて書は（句）蠹のみ硯ちりゐて

春述懐

のどかなる春のころぞ猶知らぬうき世のなかは櫻のみかは

春神祇

神垣にたのみきさらぎ今日ごとの手向は知るや松のここの葉

夏部

時 鳥明曆元年四月二十四日

ひとづてのこゑさへ嬉し郭公まだ聞かぬまも聞くこちして

橘薰袖同年五月二十四日

左右に袖こそにはへ梅が香もはなたちばなにうつるみはしは

浦夏月同

見るほどもなくて明石の浦風にすすしき月のみじか夜は惜し

更 衣同年六月二十四日

みやびとも今日は卯月の卵の花の色にかよへる白がさねして

夏夜月同年二月二十四日

庭ひろきやり水すすし夏の夜もあきやかよひてやどる月かけ

夏 雲同年四月十五日

降るあめの名残すすしくなつ山のみどりにつづく雲の色かな

橘薰枕同年五月二十五日

袖ふれし誰がうつり香ぞよひよひの枕にかよふ風のたちばな

曉 螢同年六月二十五日

あけがたの影うすくなる水のおもに螢や星のひかりそふらむ

納 涼萬治元年七月二十五日

松かげやまだ來ぬ秋のはつかせもした行く水にかよふ涼しさ

新 樹同年六月二十五日

夏山のひとつみどりにむかはめや花やもみちの色の千ぐさも

夕納涼同年五月十八日

鳴く蟬のこゑもこずるに静まりて涼しくくるる森のしたかせ

卯 花同年六月二十五日

ほととぎす語らふ聲に降りつむと見し卵の花の雪はけぬめり

穉竹佳寛文元年五月二十二日御會始

わが友と契りやおかむ今年生の竹にこもれる千代のゆくする

里郭公同三年二月二十五日

初音こそ里の名におふほととぎすしのぶともなき五月雨の頃

郭公同四年四月二十四日

はつごゑはしのびてや鳴く時鳥卯月はおまへのがときならずとて

梅雨同月同月二十七日

五月雨に岩間をこゆる池水やおもはぬすぢにながれ行くちむけ

山餘花同四年四月十一日

雲と見し昨日のはるの夢なれや山はあを葉にのこるさくらを

首夏風同

風になびく梢の夏もあさみどりを知る木木の色ぞすすしき

梢 蟬 同年六月朔

風も涼しく蟬の羽のうすみどり中に交りてしげるこずゑは

夕卯花同五年四月十二日

雪と見し卯の花山のほととぎす誰たきはかれ時のさだめとや鳴く

瀧五月雨同

五月雨はいはをつつめる白衣と見しにもあらず濁るたきつ瀬

橋五月雨同 同年五月十二日

待つ夜さへ浪にしをれて五月雨のみだれやまさる宇治の橋姫

夏里同

螢飛ぶかたにこよひは宿からむこやあしの屋の里のしるべと

樹陰夏月同 同年六月十二日

移し植ゑて軒端にあつき日をさふる松も思へば月にくやしき

蜀魂數聲同

ほととぎす數ふる聲は手ををりて遠ざかるをも慕ひてぞきく

獨聞郭公 寛文六年四月十六日

一聲はおぼつかなしやほととぎすそれかと人に聞きも合せて

首夏卯花同

夏衣さらせる賤がそでがきや今朝しろたへに咲ける卵のはな

曉鶉川 同年五月十八日

月にさへやまかげにして夏箕川あけゆくまでや鶉舟さすらし

夏野 同年六月十四日

月まちてかへれ野もせの夏草のこぼるる露にみちはたどらし

夏聲同

しがりゆく山の梢のなかに落ちてひびきも青き夏のたきつせ

殘花在何處 同年四月二十二日

流れ出づる水こそしるべ青葉山おくには残るはなをたづねむ

深山新樹同

吉野川さくらはなつのをりにあふ青根が峯のいろをふかめて

水鷄驚夢 同年五月二十七日

かかる夜の月に夢見る人やあるといさめて叩く水鷄とぞ聞く

樹陰隣秋 同年六月十三日

したかげは夏と秋とのなか垣のゝをへだてぬ松のかせのすすしさ

貴賤夏祓同

おほぬさの数も數多に今日といへば高きいやしき禊すらしも

浦五月雨 同年五月十三日

五月雨に潮くまぬ蟹も住吉のまつはひさしきはれまをや思ふ

雲外郭公同

鳴きすてて行くこゑしたふ時鳥見おくるかたを雲なかくしそ

松風如秋 同年六月十三日

しがりあふ夏のかげにも一聲の秋あるまつのかせのすすしさ

瀧五月雨 寛文八年六月十三日

岩つたふあるかなきかのしたたりも瀧落しける五月雨のころ

新梢妨月 同年九月四日

花のあとかげだにもらず茂りあひて人めも月もうとき宿かな

螢火照橋 同年六月二十二日

星かともほたるぞまがふ鵲のわたせるはしの夜半のひかりは

杜首夏同

すすしさのおひさき見ゆる若葉かなまだきびはなる森の梢に

梢 蟬

夏深くしげるこすゑのかげきよみはれやかに鳴く蟬のもろ聲

夏 木 萬治二年五月二十八日

松杉はまだうづもれぬ花もみぢ夏もわか葉のしげるこすゑに

夏 衣 同年同月二十一日

なつごろもひとへにすすし蟬の羽のうすき袂は風もたまらで

夏 草 同年六月六日

夏ふかくしげる草葉にわすれ水春みし野邊のおもがはりして

雨後時鳥 同年同 十三日

郭公おのがみちにはさはらじを雨晴るるまでなに待たれけむ

海郭公 同年七月二十日

浦づたひさこそ旅なるほととぎすしばし語らへ浪のまくらに

五月雨 同

五月雨にいけとみぎりの横潦はれぬ日かすに水かさまさりて

納 涼 同

まだきより來ぬ秋風の音羽川なみのよるよるかよふすすしさ

雲間郭公 同年十月

山の端にただよふ雲の絶間より洩れ出づる月に鳴くほととぎす

さける卯花 萬治二年十一月晦

山賤のかきねにこれもくちをしの花のちぎりや咲ける卯の花

初郭公 同三年四月二十八日

鳴きすてて行くもをしまじ初聲は人も待つらむ山ほととぎす

五月雨

たきつせも水かさまさりて音羽川おとぞすくなき五月雨の頃

浦夏月 寛文十一年六月二十五日

みじか夜はみるもいりぬる磯の草すすしき浪の月のうらかせ

窓前螢

月影をへだててしげる竹の葉や窓のほたるのひかり添ふらむ

待郭公

松ならぬこすゑにかかる藤浪のをり違へずも鳴けほととぎす

里蚊遣火 寛文十年五月十日

夕けぶりくゆらかすより賤が屋の軒にすたくもかすかなる聲

離夏草 同年六月十八日

草ふかくしげるまがきのあつき日にならす扇は風もおとせで

垣夕顔 同年十一月六日

何とかはまゆひらくらむ夕顔のはなのみかかかる賤がかきほに

夕郭公 萬治二年五月

おぼつかなそれかあらぬか時鳥夕とどろきのよそのひところゑ

五月雨晴 同

つゆしげき軒のしのぶに珍しくさみだれ晴るる月をやどして

夏月易明 同

あけやすき恨ぞ月にはれやらぬきりやかすみは夏のそらにも

鶺鴒舟多 同

大井河くだす鶺鴒舟のさまさまにおくれさきだつかがり火の影

水鶏何處萬治二年五月二十一日

山彦のこたへ（ハ）いかに誰が門とやどもさだめすたたく水鶏（ハ）は

窓 螢

燈火はのこらぬ風の窓になほひかりをそへて飛ぶほたるかな

時鳥遍

ほととぎすいたりいたらぬ里もなしおのが五月は聲も惜まで

夏草滋

人とはで庭もまがきも夏草によし野とならばうづらだに鳴け

六月祓

年浪のなかば越えゆくみそぎ川あたら月日のあだにながれて

瞿麥露寛文元年六月二十五日

百草のひとつみどりにおく露を色とりかへて咲けるなでしこ

市子規同年八月二十五日

こころいれて聞く人や聞く時鳥さわざたち（ハ）たる市のなかにも

螢火透簾同

とぶ螢おのがおもひもすきものと簾のうちのひとや見るらむ

夏月涼同年十一月五日

みじか夜の明くるぞをしき忘れては秋かとぞ思ふ月の涼しさ

遠山新樹

三輪の山しるしの杉は若みどりうすきがなかに深きいろかな

曉聞郭公

これもまたつれなく見ゆる郭公。ただひと聲のありあけのそら

雲間蜀魂寛文十二年四月二十四日

一聲（ハ）はさそはれゆくか心さへうきたつくもに鳴くほととぎす

夕納涼

夕まぐれ蟬なく松にかよふらし來ぬ秋かせもしのびしのびに

窓前螢

くれたけの夜ぶかき窓にかがやきて螢もつゆも玉とみだるる

夕立雲

みるがうちに墨をぬりたる空とのみ夕立きはふ雲ぞみちくる

河夏祓

みそぎにと今日諸人やいづみ川いつしか夏の暮れて行くせに

雲間郭公

うき雲にいま待ちいでむ月もあれどこゑはなやかにゆく郭公

夜杜鵑

あひにあひてひかりも聲もありあけの月にはえあるやま郭公

夕納涼

夕立のなごりすすしく露ちりてあきのけしきの森のゆふかせ

秋部

紅葉 承應四年二月二十四日

龍田姫たつや錦もきのふ今日まだ染めあへぬ木木のもみぢば

霧中鳴 明暦元年六月二十五日

そことなき野澤のみづに立つ鳴の羽音はしるききりの中かな

七夕契久 同年七月七日

くれ竹のよよにも絶えず天の川かみの御代より今日の逢瀬は

女郎花 同年同月二十四日

名にめでて一夜はからむ女郎花いろなる野邊の草のまくらを

曉聞鹿 同

聞のうちに聞くもおもひは有明の月につまとふ鹿のうらみを

山月 同年八月十五日

花ならぬ秋の最中の月もなほ夜よしよく見よみよし野のやま

草露映月 明暦元年八月二十四日

庭の面にくるれば露のやどりとる草葉がうへの月ぞさやけき

菊香隨風 同年九月九日

朝霧のへだてあやなく見ずもあらず見もせぬ菊のほふ秋風

岡 月 同年九月十三日

松の葉も秋はわかれてこのゆふべさすや岡邊の月のさやけさ

七夕舟 同二年七月七日

天の川よるせをいそげ一年にひとたびきますつまむかへぶね

稻 妻 同年同月二十四日

とりとめぬ光ながらもいさぎよく千ぐさのつゆをてらす稻妻

古寺 月 同年八月十五日

寺ふりぬ誰れおこなひてしづかなる心よりすむ月を見るらむ

見 月 同年同月二十四日

見る人やおのがさまさま色かはる月は千里もわかぬひかりを

菊有長生種 同年九月九日

種しあれば今日九重に咲く菊の花もいく代のあきに逢ふらむ

あかぬ紅葉の 同年十一月二十四日

心せよあかぬ紅葉のちらまくも思ふにをしき夜半のやまかせ

水邊望銀河 同三年七月七日

こよひ逢ふ星のいもせの中におつるよし野の川や天の川なみ

花洛月 同年八月十五日

思ひやるこころやとほき海山もこよひみやこの月にむかひて

露光宿菊 同年九月九日

あかず見む山路の露の色そひてちとせの秋もにほふしらぎく

池月明 同年同月十三日

さざ浪のよるさへ見よともみち葉のうつるもてらす池の月影

二星待契 明暦四年七月七日

暮るるまをいかに久しと織女の待ちえし今日も待ちやわぶらむ

月前鹿 萬治元年八月十五日

小男鹿やおもひくまなくすむ月に今宵さへうき妻や戀ふらむ

月下擣衣 同年九月十三日

賤がうつきぬたの音もたゆむなり夜寒わすれて月や見るらむ

寄月旅 同年同月十五日

あすはまたいかなる野邊の(1)に月を見むゆくへさだめぬ草の枕に

菊有新花 同年同月九日

めづらしき露のひかりもさしそふや今日九重の菊のさかづき

寄月眺望 同年同月十三日

明石がたそらもひとつの浪の上にかぎりも知らずすめる月影

二星適逢 同二年七月七日

七夕のまれのひと夜も一年のつもるうらみはいひもつくさじ

菊花臨水 同年九月九日

花を洗ふこの谷みづも白菊の知らずいく代の名にかながれむ

初雁 同三年二月二十五日

つばさこそ霧のそなたの初雁も聲はさだかに見るばかりなる

庚申七夕 同年七月七日

七夕は今宵ねぬ夜にめぐりくる年さへうしとかこたざらめや

湖邊月寛 文元年六月二十六日

浪のうへのちりばかりだに曇なき月はこほりに鴉のうみづら

七夕草花 同年七月七日

今よりはちりもすゑじと七夕やちぎらまほしきとこなつの花

池邊菊 同年九月九日